

澤瀉久孝編

伊勢物語

白
楊
社





澤瀉久孝編

〔新注古典選書 4〕

伊勢物語

白楊社

昭和二十四年九月廿五日第一刷印刷
昭和二十四年十一月一日第一刷発行
昭和二十七年一月五日第五刷発行

伊勢物語

定價 五十円

包送料 十円

版權所有



編者 沢 瀧 久 孝

發行所 京都市上京区紫竹下梅ノ木町二二 白 楊 社

發行者 京都市上京区紫竹下梅ノ木町二二 小 泉 桂

印刷者 京都市下京区猪熊通梅小路上九 中 村 勝 治

營業所

京都市下京区 株式
不明門七条下 小 会社

白 楊 社

京都中央局私書函第二八番
電話下⑤二一七八二番
振替口座京都一八六七番
出協会員A二〇八〇七八番

〔中村印刷株式会社印刷・踏真社製本〕

凡 例

- 一、本書は、大學高等學校の教科書として編纂したものである。
- 二、本書の本文は、朱雀院塗籠本と呼ばれる高二位本の忠實な透寫本とされる不忍文庫舊藏本を、國文學祕籍叢刊の複製本により、字體を通行體に改めたほかは、なるべくそのままに翻刻した。ただ濁點や句讀點を附した段が若干ある。
- 三、底本にある書き入れは、大部分右傍にある。底本で左傍にあるものは、念のため、解説末尾に列記した。朱の書き入れ（主として撰集名）は都合で割愛した。
- 四、頭注は、他の撰集に同じ和歌の見えるものを掲げ、人名地名などを略説したほか、流布定家本（天福本系統）との異同を注した。流布本を注する時は歴史的假名遣にしておいたから、鎌倉時代の文字遣である底本に對し注釋的な役割をも果すことと思ふ。
- 五、頭注でわかりにくい場合、本文の右に漢字をあて歴史的假名遣を注した。これは片假名を使ひ又（ ）に入れて、底本の書き入れと區別した。

凡 例

六、本書の編纂に當つては玉上琢彌氏を煩はした。

昭和二十四年九月一日

二

文學博士 澤 瀉 久 孝

塗籠本 伊勢物語 目次 (定家本章段對照表)

凡例	解題	本文	段數	定家本章段數	頁
		一 昔男ありけりうひかふりして……………	一	一	一
		二 昔男ありけり都の始まりける時……………	二	二	二
		三 昔男ありけり懸想しける女の許に……………	三	三	二
		四 昔東五條に大后の宮のおはしましける西の對に……………	四	四	三
		五 昔男ありけり東の五條わたりに……………	五	五	四
		六 昔男ありけり女のえ逢ふまじかりけるを……………	六	六	四
		七 昔男ありけり女を盗みて率て行く……………	ナシ	ナシ	六
		八 昔男ありけり京にありわびて東へ行きけるに……………	七	七	六

九	昔男ありけり其の男身はようなきものに思ひなして……………	八・九	……………	七
十	昔男武藏の國まどひ歩きけり……………	一〇	……………	一〇
十一	昔男ありけり東へ行きけるに……………	一一	……………	一一
十二	昔男ありけり女を盗みて武藏の國へ……………	一二	……………	一一
十三	昔武藏なる男京なる女の許に……………	一三	……………	一三
十四	昔男陸奥にすずろに至りにけり……………	一四	……………	一三
十五	昔男みちの國へ行き歩きけるに……………	一五	……………	一四
十六	昔みちの國に男住みけり……………	一五	……………	一四
十七	昔紀有常といふ人ありけり……………	一六	……………	一五
十八	昔年頃訪れざりける人の……………	一七	……………	一六
十九	昔なま心ある女ありけり……………	一八	……………	一七
二十	昔男官仕へしける女……………	一九	……………	一七
二十一	昔男大和にある女を……………	二〇	……………	一八
二十二	昔男女いとかしこう思ひかはして……………	二一	……………	一九
二十三	昔はかくなくて絶えにける仲を……………	二三	……………	二二

三十四	昔田舎わたらひしける人の子供……………	三三
三十五	昔男かたゐなかに住みけり……………	三四
三十六	昔男ありけり逢はじとも言はざりける女の……………	三五
三十七	昔男人の娘の許に……………	三七
三十八	昔色好みなりける女……………	二八・二九
三十九	昔男はつかなりける女に……………	三〇
四十	昔男宮の内にて或御達の御局の前を……………	三一
三十一	昔男津の國菟原の郡に住みける女に……………	三三
三十二	昔男つれなかりける人の許に……………	三四
三十三	昔男心にもあらで絶えにける女の許に……………	三五
三十四	昔忘れぬなめりととひとしける女の許に……………	三六
三十五	昔男色好みなりける人を語らひて……………	三七
三十六	昔紀有常ものに行きて……………	三八
	昔若き男けしうあらぬ人を……………	四〇
三十八	昔女はらから二人ありけり……………	四一

三十九	昔男好色と知る知る女を……………	四二	……………	三三
四十	昔かやのみこと申す御子……………	四三	……………	三四
四十一	昔あがたへゆく人に……………	四四	……………	三四
	昔宮仕へしける男……………	四五	……………	三五
四十二	昔すきものの心ばへありて……………	四六	……………	三五
(落丁カ)				
四十五	昔男ねんごろにいかでと思ふ女……………	四七	……………	三六
四十六	昔男ありけりものへ行く人に……………	四八	……………	三六
四十七	昔男妹のをかしげなるを見て……………	四九	……………	三七
四十八	昔男ありけり人を恨みて……………	五〇	……………	三七
四十九	昔男人の前栽植ゑけるに……………	五一	……………	三七
五十	昔男ありけり人の許より飾りちまきを……………	五二	……………	三七
五十一	昔男ありかたかりける女に……………	五三	……………	三九
五十二	昔男つれなかりける女に……………	五四	……………	三九
五十三	昔男ふして思ひ起きて思ひ……………	五五	……………	四〇

五四	昔人知れぬもの思ひける男	七〇	四〇
五五	昔心づきなま色好みなる男	七〇	四〇
五六	昔男ありけり宮仕へも忙しくて	六〇	四一
五七	昔筑紫まで行きたりける男	六二	四二
五八	昔年來衰へざりける女	六三	四三
五九	昔よ心ある女	六三	四四
六〇	昔男女をみそかに語らふわざもせざりければ	六四	四五
六一	昔帝の時めき使はせたまふ女	六五	四六
六二	昔男つの國にしる所ありけり	六六	四九
六三	昔男和泉の國に行きけり	六六	四九
六四	昔男ありけり伊勢國に狩りの使に	六九	五〇
六五	昔男狩の使より歸りけるに	七〇	五二
六六	昔男伊勢齋宮に内の御使にて	七一	五三
六七	昔そこにありと聞きけれど	七三	五三
六八	昔女をいたく恨みて	七四	五三

六九	昔男伊勢國なりける女に又もえ逢はで	七五	六五
七十	昔男伊勢國なりける女を又もえ逢はで	七三	六四
七一	昔二條の後の春宮の御息所と申しける頃	七六	六三
七二	昔きたのみこと申す御子	七六	六二
七三	昔氏の宮に御子生れたまへり	七九	六一
七四	昔衰へたる家に藤の花植ゑたる人	八〇	六〇
七五	昔左大臣にいまそかりける	八一	五九
七六	昔深草の帝の芹河の行幸したまひけるに	八四	五八
七七	昔惟喬ときこゆる御子	八三	五七
七八	昔同じ御子交野に狩歩きしたまひける	八二	五六
八十	昔水成瀬に通ひたまふ惟喬の御子	八三	五五
八一	昔男ありけり身は賤しながら母御子なりけり	八四	五四
八二	昔男ありけり童より仕うまつりける君	八五	五三
八三	昔いと若き男若き女を	八六	五二

八四	昔男つの國菟原の郡芦屋の里に	八七	六
八五	昔賤しからぬ男	八九	六
八六	昔つれなき人をいかでと思ひ	九〇	六
八七	昔月日の行くさへ歎く男	九一	六
八八	昔戀しさに來つつ歸れど	九二	六
八九	昔男身は賤しながら二つなき人を	九三	六
九十	昔二條の後の宮に仕うまつる男	九四	七
九一	昔男ありけり女をとかう言ふ事	九五	七
九二	昔堀河の大臣	九六	七
九三	昔おほきおとどと聞ゆる	九七	七
九四	昔右近馬場のひをりの日	九八	七
九五	昔男弘徽殿のはざまを渡りければ	九九	七
九六	昔男御子たちの逍遙したまふ所に	一〇〇	七
九七	昔なまあてなる男の許に	一〇一	七
九八	昔女人の心を恨みて	一〇二	七

百十九	昔男ありけり歌はたまざりけれど……………	一〇三	六
百	昔男ありけり深草帝に仕うまつりけり……………	一〇三	六
百一	昔ことなる事なくて尼になれる人……………	一〇四	七
百二	昔男かくては死ぬべしと……………	一〇五	七
百三	昔男友達の人を失へるが許に……………	一〇九	七
百四	昔男忍びて通ふ女ありけり……………	一一〇	七
百五	昔男やむごとなき女に……………	一一一	六
百六	昔男ねんごろに言ひ契れる女の……………	一一二	六
百七	昔男やもめにてゐて……………	一一三	六
百八	昔男久しう音もせで……………	一一八	六
百九	昔女あだなる男の形見とて……………	一二九	七
百十	昔いと若き人にはあらぬ……………	一八六	八
百十一	昔男女の未だ世に經ずとおぼえたるが……………	一三〇	八
百十二	昔男梅壺より雨につれて……………	一三三	八
百十三	昔男契る事あやまてる人に……………	一三三	八

百十四	昔男ありけり深草に住みけり……………	一三	八
百十五	昔男いかなる事ぞ思ひける折にや……………	一四	八
百十六	昔男都をいかが思ひけむ……………	一五	八

一、「いとなまめいたる女
はらから住みけり」

二、「この男垣間見てけり」
三、「いとはしたなくて」

四、「こちまどひ」

五、しのお摺り、奥州信夫
郡の名産

六、六帖第五、すり衣

七、「おひつぎていひやり
ける、ついでおもしろき事
ともや思ひけむ」

八、「みちのくの」みだれそ
めにし、六帖第五、すり衣。
古今十四、戀四、「題しらず、
河原左大臣、亂れむと思ふ」
九、心ばへ

「一」昔男ありけりうひかふりしてならの京かすかのさとにしるよ
ししてかりにいきけりそのさと(二)にいとなまめきたるをむなはらす
みけりかのをとこかみまみてけりおもほえすふる里にいともはした
なくありければうちま(四)とひにけり男きたりけるかりきぬのすそをき
りてうたをかきてやるそのをとこ忍(五)すりのかりきぬをなむきたりけ
る

春(六)日野のわかむらさきのすりころものふのみたれかきりしられ

す

となむをいつぎてやれりけるとなんいひつきてやれりけるおもしる

きことゝや

みちのくに忍もちすりたれゆるにみたれそめにし一本
といふ歌のこゝろ(九)はゑなり昔人はかくいちはやきみやひをなむしけ

一、コノ句ナシ

二、「まだ定まらざりける時に、西の京に」

三、「まされりけりその人」

四、「まさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし」

五、「歸り来ていかと思ひけむ」

六、「ついたち、雨そぼふるに」

七、古今十三「やよひのついたちよりしのびに人に物をいひて後に雨のそぼふりけるに詠みて遣しける在原業平朝臣、起きもせず」

八、大和物語参照

九、「ひじきも、和名抄鹿尾菜、辨色立成云、六味菜、比須木毛」

る

〔二〕昔男ありけり。みやこのはじまりける時、ならのきやうははなれ、この京は人の家いまださだまらざりける時、西京にをんなありけり。その女、よの人にはまさりたりけり。かたちよりは心なむまされりける。人その身もあらざりけらし。それを、かのみめをとこ、うち物かたらひて、かゝりきて、いかとおもひけん。時はやよひのつひたち、雨うちそぼふりけるに、やりける。

をきもせずねもせてよるをあかしてははるのものとながめくらしつ。

〔三〕むかし、をとこありけり。けさうしける女のもとに、ひじきといふものをやるとて、

おもひあらばむぐらのやどにねもしなむひしきものには袖をしつ

一、「二條の後のまだ」
 二、「仕うまつり給はで」
 三、「ひんがしの五條に大
 後の宮おはしましける西の
 對に」
 四、「心ざし深かりける人
 ゆきとぶらひけるを」
 五、「とをかばかりのほど
 に」
 六、「いきかよふべき所」
 七、「梅の花盛に、去年を戀
 ひていきて、立ちて見、居
 見て見、見れど」
 八、「似るべくもあらず、う
 ち泣きて」
 九、「思ひ出でて」
 二〇、古今十五、戀五「五條
 の後の西の對に住みける人
 に、本意にはあらで物言ひ
 わたりけるを、む月の十日
 あまりになむ外へ隠れにけ
 る、あり所は聞きけれど、
 え物も言はで、又の年の
 春、梅の花盛に、月の面白
 かりける夜、去年を戀ひて
 か、西の對にいらきて、月
 傾くまであばらなる板敷に
 ふせりてよめる。在原業
 平朝臣」

入も

五條後の、いまだ御門にもつかうまつらで、ただ人にておはしける
 時の事なり。

〔四〕昔、東五條におほぎさひの宮のおはしましける西のたいに、
 すむ人ありけり。それを、ほいにはあらで、ゆきとぶらふ人、こゝ
 ろざしふかゝりけるを、むつきの十日あまり、ほかにかくれにけ
 り。有所はきけど、人のいきよるべきところにもあらざりければ、
 なを、うしとおもひつゝなむありける。またの年のむ月に、梅華ざ
 かりなるに、こぞをおもひて、かのにしのためいきてみれど、こ
 ぞににるべうもあらず。あばらなるいたじきに、月のかたぶくまで
 ふせりて、こぞを戀て、よめ。

月やあらぬはるやむかしの春ならぬ我身ひとつはもとのみにして

- 一、「夜のほのく」と
- 二、「忍びて行きけり、みそかなる所」
- 三、「え入らで、童の踏みあけたる築地の崩れより」
- 四、「人繁くもあらねど」
- 五、「いけどもえ逢はで歸りけり、さてよめる」
- 六、古今十三、戀三、「東の五條わたりに人を知りおきてまかり通ひけり、忍びなる所なりければ、門よりしもえ入らで、垣の崩れより通ひけるを、度重なりければ、あるじ聞きつけて、かの道に夜毎に人をふせて守らすれば、いきけれどえ逢はでのみ歸りて、よみてやりける 業平朝臣」
- 七、「とよめりければ、いといたく心やみけり」しんじへんじか
- 八、「え得まじかりけるを」
- 九、「盗み出でて、いと暗きに來けり」
- 一〇、攝津國三島郡
- 一一、「草の上に置きたりける」

とよみて、ほのく(三)とあくるに、なくく(露リ)かゑりにけり。

〔五〕 むかし男ありけりひんかしの五條わたりにいと忍(三)いきけりし
 のふところなればかとよりむ(三)いらてついちのくつれよりかよひけり
(四)人たかしくもあらぬとたひかさなりければあるしきよつけてそのか
 よひちによことに人をすゑてまもらせければか(五)の男ゑあはてかゑり
 にけりさてつかはしける

人(六)しれぬわかよひ路のせきもりはよひくことにうちもねなむ

とよみけるをきゝていといたうしんしけるあるしゆるしてけり

〔六〕 昔男有けりをんなのゑ(八)あふましかりけるをとしをへていひわ
 たりけるにからうしてをんなのこ(九)ゝるあはせてぬすみていてにけり
(一〇)あくたかはといふ河をゐていきければ草(一一)のうゑにをきたる露をかれ

- 一、「多く」
- 二、「夜もふけにければ」
- 三、「神さへいといみじう
鳴り雨もいたう降りけれ
ば」
- 四、「倉に」
- 五、「男弓胡録を負ひて、戸
口に居り、はや夜も」
- 六、「鬼はや一口に」
- 七、「あなや」
- 八、「夜も明け行くに」
- 九、「率て來し女もなし、
足摺をして泣けども」
- 一〇、「答へて消えなまし」
- 一一、「いとこの女御の御も
とに仕うまつるやうにて」
- 一二、「負ひて出でたりける
を、御兄人、堀河のおと
い、太郎國經の大納言、ま
だ下臈にて」
- 一三、「泣く人あるを」

はなにそとなむ男にとひけるゆくさきはいとほくよもふけければ
鬼あるところともしらて雨(三)いたうふりかみさゑいといみしうなりけ
れはあはらなるくら(四)のありけるに女をはを(五)くにをしいれてをとは
ゆみやなくひをおひてとくちにはやよもあけなむとおもひつゝ(六)いた
りけるほとに鬼(七)はやをんなをはひとくちにくひてけりあゝやといひ
けれとかみのなるさは(八)きにゑ(九)きかさりけりやう／＼夜(一〇)のあけゆくを
みれはいてこし女(一)なしあしすりしてなけとかひなし

白玉かなにそと人のとひし時露とこたゑてけなましものを

これは二條のきさきの御いとこの女御のもとにつかうまつりひとの
やうにていたまへりけるをかたちのいとめてたうおはしければぬす
みていてたりけるを御せうとのほりかはの大將もとつねの國經大納
言などのいまた下らうにてうちへまいりたまふにいみしうなく人の

- 一、「留めて取返し」
- 二、「鬼とはいふなりけり、まだいと若うて、后のたゞにおはしける時とや」
- 三、コノ段定家本ナシ、皇太后宮越後(紫式部ノ娘カ)本、小式部本、神宮文庫本アリ、校異ハ此等ノ本
- 四、「なむ行く道に、水のある所にて、飲まむとや、と問ふに」
- 五、「杯なども具せざりければ」
- 六、「のぼりければ、もとの所に歸り行くに、かの水飲みし所にて」
- 七、「男なくなりなければ」
- 八、「掬びつゝ」
- 九、「と言ひてきにけり、はれく」越、神「消えにけり、あはれく」小ナシ
- 一〇、「浪いと白く立つを見て」

二、コノ句ナシ

あるをきゝつけてとりかゑしたまひてけりそれをかくをにとはいゑるなりいまたいとわかうてたゝにきさひのおはしけるときとや

〔七〕 昔をとこありけり女をぬすみていてゆくみちにてみづのまむととふにうなづきければつきなむどもぐせねば手にむすびてのますさてゐてのぼりにけりをむなはかなくなりなければもとの所へゆくみちにかのし水のみし所にて

おほはらやせがひの水をむすびあげてあくやといひし人はいづらか

といひてきゑかゑりあはれくといへどかひなし

〔八〕 昔、男ありけり、京にありわびて、あづまへゆきけるに、伊勢をはりのあはひのうみづらをゆくに、浪のいとしろくたちかゑるをみて、思ことなきならねば、をとこ

一、後撰十九羅旅「東へ罷りけるに、過ぎぬる方戀しくおぼえける程に、川を渡りけるに、浪の立ちけるを見て 業平朝臣」

二、「をちこち人の」、新古今十、羅旅「東の方に罷りけるに、淺間の嶽に煙の立つを見てよめる 在原業平」

三、「友とする人一人二人していきけり」

四、「所に至りぬ、そこを八橋といひけるは、水行く川の蜘蛛手なれば、橋を八つ」

五、「いひける」

六、「の、木の陰におりゐて」

七、「ある人のいはく、杜若といふ五文字を句の上に据ゑて旅の心をよめ」

いとどしくすぎかたのこひしきにうらやましくもかゑるなみかな(カヘル)

〔九〕 むかし、男ありけり。其男、みはよくなき物におもひなしで、京にはをらじ、あづまの方にすむべきところもとめに、とていきけり。しなのゝ國あさまのたけに煙たつをみて、

しなのなるあさまのたけにたつ煙をちかた人のみやはとがめぬ(三)

もとよりともする人ひとりふたりして、もるともにゆきけり。みちしれる人もなくて、まどひゆきけり。三かはのくに八橋といふとこ(四)

□□いたりぬ。そこやつはしといふ事は、水のくもてにながれわかれて、木八わたせるによりてなむ、八橋とはいゑる。そのさはのほ(五)

とりに、木景にをりゐて、かれいゑるくひけり。そのさはにかきつば(六)

たいとおもしろくさきたり。それをみて、京いとこひしくおぼえけり。さりければ、ある人、かきつばたと云いつもじをくのかしらに(七)

一、「よめる」

二、古今九、羈旅「東の方へ友とする人一人二人いざなひていきけり、三河の國八橋といふ所に到れるに、その川のほとりに杜若いと面白く咲けりけるを見て、木のかけりにおりみて、かきつばたといふ五文字を句の頭にすゑて旅の心をよまむとてよめる 在原業平朝臣」

三、駿河國安倍郡、宇津谷

四、「我が入らむとする道は」

五、「道はいかでおはすると言ふを」

六、「御許に」

七、「うつつ」にも六帖第二「うつつのお山の現にも夢にも見ぬに人の戀しき」

すゑて旅心よめ、と、いひければ、ひとの人よめり。

から衣きつゝなれにしつましあればはる／＼きぬるたびをしぞお

もふ

とよめりければ、みな人かれいゐのうゑになみたをとしてほとびにけり。

ゆき／＼とするがのくにゝいたりぬ。うつつ(三)の山にいたりて、わかゆ

(行末)

くすへのみちは、いとくらくほそきに、つたかづらはしげりて、物

(心 細ウ)

ころほそふ、すゑなるめをみると、思に、修行者あひたり。

かゝるみちにはいかでおはする、といふに、みれば、みし人也け

り。京に、そのひとの(六)もとに、とて、ふみかきて、つく。

するがなるうつつ(七)の山邊のうつつともゆめにもひとのあはぬなりけ

り

一、六帖第一、雪

二、「其の山は、こゝに譬へば、比叡の山をはたちばかり重ね上げたらむ程して、なりは鹽尻のやうになむありける」

三、「しもつふさの國との中に」

四、「それをすみだ河といふ」

五、「わびあへるに」

六、「言ふに」

七、「しも、白き鳥の」

八、「一字ナシ」

ふじの山をみれば、五月つごもり、雪いとしろくふりたり

時(二)しらぬやまはふじのねいつとてかかのかまだらに雪のふるらん

この山は、うゑ(上)はひろくしもはせ(狭クテ)ばくて、おほがさのやうになむありける。高はひゑの山をはたちばかりかさねあげたらむやうになむ

ありける。
なをゆき(猶)／＼て、むさしのくにとしもつさの國とふたつがなかに、

いとお(大キ)きなる河あり。そのかはの名をばすみだ河となむいひける。其河のほとりにむ(群居テ)れいて、おもひやれば、かぎりなくとをく(遠ク)

きにけるかな、と、わび(五)をれば、わたしもり、はや船にのれ、日もくれぬ、といふ(六)。のりてわた覽(ラム)とするに、みな人、ものわびしくて、京におもふ人なきにしもあらず。さるをりに、白鳥の、はしと

あしとあかき(心)が、しぎ(鳴ノ)のお(大キサ)きさなる、水上にあそびつ(魚ヲ)ゝ、いを

一、「皆人」
 二、二字ナシ
 三、「名にし負はば」我が
 思ふ人は、古今九、羈旅
 中、武蔵の國と下總の國との
 中にあるすみだ川の邊に到
 りて、都のいと戀しうおほ
 えければ、暫し河の邊におほ
 りみて思ひやれば、限りな
 く遠くも來にけるかなと思
 ひわびてながめ居るに、渡
 し守はや舟に乗れ、日も暮
 暮れぬといひければ、舟に
 乗りて渡らむとするに、皆
 人なくしもあらず、さる折
 に白き鳥のはしと足と赤
 き、河のはとりに遊びけ
 れば、皆人見知らず、渡し
 守にこれは何鳥ぞと問ひけ
 ければ、これなむ都鳥といひ
 けるを聞きてよめる 在原
 業平朝臣」
 四、「舟こそりて泣きけり」
 五、「以下ナシ」
 六、「國まで」
 七、「さて其の國にある女
 を」
 八、「なほ人」
 九、「は」ナシ
 一〇、「おこせたりける、所な

食フ。京にはみゑぬ鳥なれば、人く見しらず。わたしもりにとゑ

ば、これなむ都鳥と申、といふをきゝて、

なにしほはばいざ事とはんみやこ鳥我おもふ人ありやなしやと

とよめりければ、舟人こそりてなきにけり。

その河渡すぎて、京に見し、あひて、物語して、ことづてやあると

いひければ

みやこ人いかゞとはゞやまたかみはれぬ雲井にわぶとこたゑよ

〔十〕 昔男むさしのくにまといひけるに母なんあてなる人にて

はひけり父はこと人にあはせむといひけるに母なんあてなる人にて

ゝろつきたりけるちゝはたゝ人にてはゝなむ藤原なりけるさてなむ

あてなる人にとはおもひけるこのむこかねによみてをこせたるすむ

さとはむさしのくにいるまのこをりみよしのゝさとなり

む入間の郡」

一、六帖第六

二、「塔がね返し」

三、六帖第六

四、「となむ、人の國」

五、「なむやまざりける」

六、拾遺八、雜上「橘忠基
が人のむすめに忍びて物い
ひはべりける頃、遠き所に
罷りはべるとて、この女の
もとにいひ遣はしける
讀人しらず」

七、「人のむすめを」

八、「いてゆく程に」

九、「國の守に翫められけ
り」

みよしのゝたのむのかりもひたふるにきみかかたにそよるとなく

なる

かゑしむこかね

我かたによるとなくなるみよしのゝたのむの鴈をいつかわすれむ

人のくににてもかゝる事はたゑすそありける

昔、男有けり。あづまへゆきけるに、ともだちにみちより

をこせける

わするなよほどは雲井になりぬともそらゆく月のめぐりあふまで

昔男ありけり女をぬすみてむさしの國へゆくほとにぬす人な

りければくにのつかさからめければをんなをは草村のなかにをきて

にけにけりみちゆく人此野はぬす人ありとてひをつけむとするにを

んなわひて

一、「古今一、春上」題しらず、讀人しらず、春日野は」

二、「いていにけり」

三、「恥づかし聞えねば」

四、「書きておこせてのち音もせず」

五、「頼むには」

六、「なむ堪へ難きこゝちしける」

七、「京の人は珍らかにやおぼえけむ」

むさし(三)のは今日はなやきそわかくさのつまもこもれりわれもこもれり

とよみけるをきゝてこの女をはとりてともにゆき(三)にけり

〔十三〕 昔むさしなるをとこ京なるをむなのもとにきこゆればは(三)つきこねはくるしとかきてうはかきにむさしあふみと(四)のみかきてのちをともせずなりにければきやうよりをんな

むさしあふみさすかにかけておもふ(五)にはとはぬもつらしとふもうるさし

とあるをみてをむ(六)なたゑかたきこゝちしけり

とゑ(間へぶ)はいふとはねはうらむむさしあふみかゝるをりにや人はしぬらむ

〔十四〕 昔男みちのくにゝすゝるにいたりにけりそこなる女京(七)の人を

一、「思へる心なむありける」

二、萬葉十二、「なか／＼に人とあらずは桑子にもならましものを」

三、「ひなびたりける」

四、「言へるに」

五、古今二十、陸奥歌「小黒崎みつこの島の」

六、「いはましを」

七、「よるこぼひて思ひけらしとぞ言ひ居りける」

はめつらやかにかおもひけんせちにおもゑるけしきなむみへけるさ
(見エ)
てをむな

なか／＼にこひにしなすはくはこにそなるへかりけるたまのをは
(三)
かり

うたさへそひかめりけるさすかにあはれとやおもひけんいきてねに
(三)
けりよふかくいてにければ女

よもあけはきつにはめなてくたかけのまたきになきてせなをやり
つる

といひける男京へなむまかるとて
(三)

くりはらのあねはのまつのひとならはみやこのつとにいさといは
(五)
まし

といへりければよるこひて思けり／＼とそいひける
(七)

一、「みちの國にて」
二、「人のめに」
三、「女ともあらず」

四、六帖第二

五、二字讀ミ難シ、「さるさ
がなきえびす心を見てはい
かゞはせむは」

六、「みちの國にて男女住
みけり男都へ去なむと言ふ
此の女いと悲しうて馬のは
なむけをだにせんとて、お
きののみやこじまといふ所
にて」

七、「おきのゐて身をやく
よりも悲しきはみやこしま
べの」古今盛消、物名「お
きのゐ、みやこじま、小野
小町」

〔十五〕 昔男^(三)みちのくにへいきありきけるになてうことなき人^(三)のむす
めにかよひけるにあやしくさやうにてあるへきを^(三)をんなにはあらずみ
ゑければ

忍山^(四)しのひてかよふみちもかな人のこゝろ^(五)のをくもみるへく

をんなかきりなくめてたしとおもへと□□^(五)さかなきゑひす所にてい
かゝはせむ

〔十六〕 昔^(六)みちのくにへ男すみけり京へいなんとするに女いとかなし
と思てむまのはなふけをたにせむとてをきののみやこじまといふ
所にてさけのませんとしてよめる

をきのいて身おやくよりもわ^(七)ひしきはみやこじまのわかれなり
けり

とよめりけるにめてゝとまりにけり

一、「正四位下名虎の子、元慶元年正月廿三日卒、六十

三
二、「仕らまつりて時に遇ひけれど後は」

三、「世の常の人のごとくあらず。人柄は」

四、「時失へるカ」

五、「貧しく經ても、猶」

六、「コノ句ナシ」
七、「相馴れたるめ」
八、「なりたる所へ行くを男」

九、「あはれと」

一〇、「相語らひける友達の許に」

一一、「いさゝかなる事もえせで」

一二、「手を折りてあひみし事を」

〔十七〕 昔紀有常といふ人ありけりみよの御門に仕て(三)ときにあひたり

けれとのちにはよかはり時うつりにければよのつねのとき(四)うしるへ

る人になりけり人から心うつくしうあてなる事をこのみてこと人

にもにすよ(五)のわたらひ心もなくまつしくてなを昔よかりし時の心な

からありわたりけるによのつねの事もしらす年ころありなれたるめ(六)

もやうくとはなれてついに尼になりてあねのさきたちて尼にな(七)

りにけるかもとへゆくをとこまことにむつまじき事こそなかりけれ

いまはとてゆくをいとあはれ(九)とはおもひけれとまつしければするわ

さもなかりけりおもひわひてねんころにかたらひけるともたちにか

うくいまはとてまかるをなに事もいさゝか(一〇)の事もせてつかはす事

とかきてを(奥)く

手をりてへ(一一)にける年をかそふれはとをといひつゝよつはへにけ

一、「かの友達」

二、「夜のものまで贈りてよめる」

三、「四つは」

四、「頼みきぬらむ」

五、「かくいひやりたりければ」

六、「コノ句ナシ」

七、「あまの羽衣、君がみけしと」

八、「堪へで、又」

九、一字ナシ

一〇、「櫻の盛りに見に」

一一、「古今一、櫻の花の盛りに久しくとはざりける人のきたりける時によみける
讀人しらず」

り

このともたちこれをみていとあはれとおもひて女のさうそくを一具をくるとて

としたにもとをとてよつをへにけるをいくたひ君をたのみきつ覽(添へテ)かくいひたりければよろこひにそゑて

これやこのはころもむへしこそ君のみけしにたてまつりければよろこひにたゑかねてまた

秋やくるつゆやまかふとおもふまであるはなみたのふるにそありける

〔十六〕昔年ころをとつれざりける人のさくらみにきた(た)りければあるし

あなたなりと名にこそたてれ櫻はなとしにまれなる人もまちけり(返シ)かゑし

一、「右ノ」返し 業平朝臣」
二、「消えずはありとも」

三、「枝もとをよに降るか
とも見ゆ」

四、「女の方に御達なりけ
る人を相知りたりける程も
なくかれにけり。同じ所な
れば女の目には」
五、「ある物かとも思ひた
らず」

六、「古今十五、戀五」業平
朝臣紀有常が娘にすみける
を、恨む事ありて、しばし
の間、晝は來て夕されば歸
りのみしければ、よみて遣
しける」

今日こすはあすは雪とそふりなまし(三)きゑすはありと華とみましや

〔十九〕 昔なまこゝろあるをんなありけりとことかういひけり女歌

よむ人なりければこゝろみむとて(梅ヲ折リテ)むめををりてやる

く(紅)れなひ(三)ににほふはいつらしら雪のゑたもたわよにふるやともみ

ゆ

男しらすよみによみけり

くれなひににほふかうゑのしら雪はをりける人のそてかとそみる

〔二十〕 昔男みやつかへしける女(四)こたちなりける人をあひしれりけり

ほともなくかれにけりをなし所なりければさすかに女のめにはみゆ

る物からをとこ(五)はあるものにもおもひたらねはをんな

あ(六)まくものよそにも人のなりゆくかさすかにめにはみゆるものか

ら

一、「古今、右ノ」返し
平朝臣、行き返り」業

二、「人となむいひける」

三、段數ノ朱書ヲ缺ク

四、「見てよばひて」

五、「歸り來る途に彌生ば
かりに楓の」

六、「住みし女ノ許にカ、」女
の許に途より言ひやる」

七、「來着きてなむ」

とよめりければをとこ

(二)あまくものよさにのみして一本
ゆきかゑりそらにのみしてふることはわかいるやまのかせはやみ

(居ル)

なり

とよめるはあまたをとこあるをむなになむありける

「」昔男(三)やまとにある女をよはひてあひにけりさてほともへてみ

やつかへしける人なりければかゑりける(五)みちにやよひはかりにや

まにかゑるのもみちのいとおもしろきをおりて(六)すみしをむるもと

に道より

君かためたをれる(七)ゑたははるなからかくこそ秋のもみちしにけれ

とてやりたりければ返事は京に(七)いきつきてなむもてきたりける

いつのまにうつるふいろのつきぬらん君かさとははるなかるら

し

- 一、「けりさるを」
 二、「いさゝかなる事につけて」
 三、「と思ひて」
 四、「歌をなむよみて」
 五、「心かるしと」〔六帖第四「業平」〕
 六、「知らねば」
 七、「女」
 八、「けしう心おくべき事もおほえぬを」
 九、「かゝらむと」
 一〇、「と見かう見見けれどいつこをはかりとも」
 一一、「や」
 一二、「と言ひて詠め居り」
 一三、萬葉二、「天皇(天智)崩御之時倭太后作歌一首、人はよし思ひやむとも玉かつら影に見えつゝ忘らえぬかも」
 一四、「いと見えつゝ」

〔三三〕昔男女いとかしこう思かはしてこと心なかりけるをいかなる事かありけむはかなき事にことつけて世中をうしと思ていていなむとてかゝるうたなむ物にかきつけける

いてゝいなはこゝろかるしといひやせんよのありさまを人はしらすて

とよみてをきていてゝいにけりこの男かくかきをきたるを見てこゝろかるへき事もおほえぬをなにゝよりてならむいといたううちなきていつかたにもとめゆかむとかとにいててとみかうみけれといとこをはかともおほえさりけれはかゑりいりて

おもふかひなき世なりけり年月をあたにちきりてわれかすまひし人はいさななめやすらんだまかつらおもかけにのみいてゝみえつ

- 一、コノ文ナシ
- 二、「念じわびて」
- 三、「ありけむ言ひおこせたる」
- 四、「まかせずもがな」

五、「植うとだに聞く」

六、古今十四、戀四、題しらず、
 讀人しらず、忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ悲しき」
 七、「心の疑ひに」

八、「なりにける哉」

といて、ななかめをりこの女いとひさしうありてねむしかねてにやあ
(言ヒオコシ)
 らむかくるをこしたり

いまはとてわするゝくさのたねをたに人のこゝろにまかせすみか

な
(返シ)
 かゑし男

わすれくさかるとたにき□ものならはおもひけりとはしりもしな
 まし

またくありしよりけにいひかはしてをとこ

わする覽とおもふこゝろうたかひにありしよりけにものそかなし

き
(返シ)
 かゑし

なかそらにたちいる雲の跡もなく身のはかなくもなりぬへきかな
(立チ居ル)

一、「猶や忘れざりけむ」

二、「言へりければされば
よと言ひて男」
三、「逢ひ見ては」

四、「など言ひて」
五、「なずらへて」
六、「時のあらむ」

といひけれともをのかよゝになりにつれはうとくなりにつり

「二十三」昔はかなくてたへにけるなかを(二)はわすれざりけむをんなのも

とより

うきながら人をは(エシモ)ゑしむわすれねはかつうらみつゝなを(猶)そこひし

き

といひけれはされはよとおもひて

あひはみてこゝろひとつをかはしまの水のなかれてた(絶エジトツ)ゑしとそお

もふ

とはいひけれとそのよいにけりいにしへゆくさきの事とも(四)そおもふ

秋のよのちよをひとよにな(五)そらへてやちよしねはやあくよしのあ

らむ

(返シ)
かゑし

一、「古へよりも哀れにてなむ通ひける」アリ

二、古今十八雜下・大和物語參照

三、「あはずれどもきかで」

四、「かくなむ」

五、「まろがたけ過ぎにけらしな妹みざるまに」

六、「など言ひくゝて遂にほいの如く」

七、「女親なくたよりなくなるまゝに諸共にいふかひなくてあらむやはとて河内國高安郡に行き通ふ所」

秋のよの千夜をひとよになせりともことはのこりてとりやなきな
ん^(二)

〔三十四〕^(三)むかしい^(田舎)なかわたらひしける人のことも井のもとにいてゝあ

そひけるををとなになりければをとこも女もはちかはしてありけれ

と男はこの女をこそ^(得メ)忍め女はこの男をとおもひつゝをやのあはする^(三)

事もきかてなむありけるさてこのとなりのをとこのもとよりなむ^(四)

つゝゝるつゝのゝつゝにかけしまろのたけをひにけらしなき^(五)み見ざる^(生ヒ)

まに

か^(返シ)ゑし女

くらへこしふりわけかみもかたすぎぬ君ならすしてたれかなつへ^(六)

き

かくいひて本意のことくあひにけりさて年ころふるほとに女の^(七)をや

一、「思へる氣色もなくて
 出だしやりければ」
 二、古今十八「雑下」ひと
 り越ゆるある人、この
 歌は昔大和の國なりける
 人の女に、ある人すみわた
 りけり、この女、親もなく
 なりて、家もわることゆ
 くに、この男河内の國に
 人をあひ知りて通ひつゝ、
 かれやうにのみなりゆきけ
 り、さりけれど、つらげ
 なる氣色も見え、河内へ
 いくごとに、男の心の如く
 にしつゝ、出しやれば、
 あやしと思ひて、もしなき
 まにこと心もあると疑ひ
 て、月のおもしろかりける
 夜、河内へいくまねにて、
 前裁の中に隠れて見けれ
 ば、夜ふくるまで琴をかき
 ならしつゝ、うちなげき
 て、此の歌をよみて寝にけ
 り、これを聞きて、それよ
 り又外へもまからずなりに
 けりとなむ言ひ傳へたる。」
 三、「越ゆる」
 四、「いかずなりにけり」
 五、「心にくも」
 六、「髪を頭にカ、コノ二句
 他本ナシ」
 七、「手つから」
 八、「盛りけるを」

なくなりてたよりなかりければかくてあらむやはとて河内國へ高安
 のこほりにいきかよふいてきにけりされとこのものをむなあしと
 おもゑるけしきもなくくるれはいたしたてゝやりければ男ことこゝ
 ろありてかゝるにやあらむとおもひうたかひて前裁のなかにかくれ
 (居テ)。いてかの河内へいぬるかほにてみればをむないとようけさうしてう
 ちなかめて

(三) かせふけはをきつし(沖)らなみ龍田(白浪)やまよはにやきみかひとりゆ(三)く覽

とよめりけるをきゝてかきりなかなしとおもひて河内へも(四)をさ
 くかよはすなりにけりさてまれくかのたかやすのこほりにいき
 てみればはしめこそ心(五)にくもつくりけれいまはうちとけてかみ(六)をよ
 しらにまきあけておもなやかかなるをむ(七)なのでつらい(飯)みか(匙)ひをとり
 てけこのうつは物(八)にもりていたりけるを見てこゝろ(居タリ)うかりていかす

一、萬葉十二「君があたり見つゝもをらむ生駒山雲なたなびき雨は降るとも」
 二、「見つゝを居らむ」
 三、大和河内の國境

四、「頼まぬものゝ戀ひつゝぞふる」

五、「待ちわびたりけるに」

六、「叩きけれど開けて歌をなむ」

なりにけりさりければかの女やまとのかたをみやりて

君(一)かあたりみつ(二)ゝをくらむいこまやま雲(三)なくしそ雨はふるとも

といひてみいたすにからうして大和人こむといゑり(四)よるこひてまつ

にたひくすきぬれば

君こむといひしよことにすきぬればたのめぬものこゝひつゝを

る

といゑり(言ヘリ)けれと男すますなりにけり

昔男かたるなかにすみけりをとこみやつかへしにとてわかれ

をしみてゆきにけるまゝにみとせこさりければまちわたりけるに(五)

とねんころにいひける人にこよひあはむとちきりたりけるにこの男

きたりけりこのとあけ給へとたたきければあけてなむ歌をよみてい

たしたりける

一、續古今十四、戀四「題
しらず 讀人しらず」

二、「しければ女」

三、六帖五「末のたづきは
知らねども、續後撰「引き
み引かすみ」

四、「追ひゆけど、え追ひつ
かで」

あらたまのとしのみとせをまちわひてたよこよひこそにひまくら

すれ

といひいたしたりければをとこ

あつさ弓まゆみつきゆみとしをへてわかせしかことうるはしみせ

よ

といひていなんとすれはうらみてをむな

あつさ弓ひけとひかねとむかしよりこゝろは君によりにしものを

といひけれと男かゑりにけり女いとかなしうてしりにたちてをひけ

れとゑをひつかけてしみつのあるところにふしにけりそこなるいわに

をよひのちしてかきつけけり

あひおもはてかれぬる人をとよめかねわか身はいまそきえはてぬ

める

とかきていたつらになりけり

〔二十六〕昔男ありけりあはしともいはさりける女のさすかなりけるか

もとにいひやりける

〔二十七〕秋の野のさゝわけしあさの袖よりもあはてぬるよそひちまさりけ

る

いろこのみなるをんな(返シ)かゑし

〔二十八〕みるめなきわかみのうしとしらねはやかれなてあまのあしたゆく

ころ一本
ゝる一本

〔二十九〕昔男人のむすめのもとにいちやはかりいきてまたもいかすな

りにければ女の(五)をやはらたちて手あらふところにぬきすをとりてな

けすてければたらひの水になくかけのみゑけるを身つから

われはかりものおもふ人はまた(六)あらしとおもへは水の(七)したにあり

一、古今十三、戀三「題し
らず 業平朝臣、あはでこ
し夜ぞ」

二、古今、右ノ歌ノ次ニ「題
しらず 小野小町」
三、「我身をうらと」

四、「女のもとにひと夜い
きて」

五、「女の手洗ふ所に貫簀
をうちやりて盥の影に見え
けるを、みづから」

六、「またもあらしと」
七、「下にも」

一、「よむを來ざりける男
立ち聞きて」

二、以下ナク、直チニ歌
三、「になりけむ」結びし
ものを」

四、「昔東宮の女御の御方
の花の賀に召しあづけられ
たりけるに」

五、「今日の今宵に似る時
はなし」

六、以下ナシ

けり

とよめりけるをこのこさりけるをとこぎへて

みなくちにわれやみゆらんかはつさる水(蛙サ)のしたにてもろこゑにな

く

「三六」昔いろこのみなりける女いてゝいにければいふ(三)かひなくて男

なとてかくあふ(あふかたもと一本三)こかたみとなりぬらんみつもらさしとちぎりし(むすひしものを)も

一本
のを

二條(四)後の春宮のみやすところとまうしける時御かたのはな(花ノ宴)のゑんに
めしあけられたりける肥後すけなりける人

花にあかぬなけきはいつもせしかともあふ(五)のこよひにし(をり一本)くものは

なき

とよみてたてまつれり(六)

一、新勅撰十五、戀五題し
らず 讀人しらず「おもほ
えて、長くもあるかな」
二、「見ゆらむ」

三、「前を渡りけるに、何
の仇にか思ひけん」
四、「よ」又「に」

五、「うけへば忘れ草己が
上にぞ」

六、「ねたむ女もありけり」
七、「郡に通ひける女この
度いきては又は來じと思へ
るけしきなれば男」

〔三十九〕 昔をとこはつかなりけるをむなに

あふ事(二)はたまのをはかりおほへてつらきころのなかく(三)みるら
ん

〔四十〕 昔男みやのうちにてあるこたちのみつほね(四)のまる(五)をわたるに
なにをあたとかおもひけんよしやく(六)さは(七)のならむ(八)さか(九)にむ(一〇)といひけ
れはをとこ

つみ(一)もなき人(二)をうちへ(三)はわすれくさをのかうへ(四)にそおふといふな
る

といふ(五)をねたう(六)をなもおもひけり

〔三十一〕 昔男つ(一)のくにう(二)はら(三)のこ(四)をりにすみける女にかよひけるこの
たひ(五)かゑり(六)なはまたはよもこしとおもへるけしき(七)をみて女のうらみ
ければ

一、「葦邊より」萬葉四「山口女王贈大伴宿禰家持歌五首、思へか君が忘れかねつる」

二、續後撰十一、戀一「業平朝臣のもとより君に心をといへりける返り事に、讀人しらず、隠り江に、棹の」
三、「よしやあしや」

四、六帖第四「言へばえに言はねば苦し世の中を歎きてのみも過すべきかな」
五、「胸に騒がれて」

六、「おもなくて言へるなるべし」

七、萬葉四、紀女郎贈大伴宿禰家持歌二首「玉の緒を沫緒に撻りて結べればありて後にもあはざらめやも」
八、「絶えての後も逢はむとぞ思ふ」

(二) 五一本
あしまよりみちくるしほのいやましに君にこゝろをおもひますか

な

(女) 返(シ)
をんながるし

(三)
こもりへにおもふ心をいかてかはふねさすさをのさしてしるへき

いなかの人の事にてはいか

〔三十一〕昔男つれなかりける人のもとに

(四)
いゑはゑにいねはむねのさはかれてこゝろひとつになけくころか

な

(六)
おもひくいていゑるなるへし

〔三十二〕むかし男こゝろにもあらでたゑにける女のもとに

(七)
たまのをあはをによりてむすへればあひてのちもあはぬなり
あはむとそお

もふ一本
けり

- 一、「ぬるなめり」
二、萬葉十四「峰に這ひたる玉葛絶えむの心」
三、「絶えむと人に」

四、以下ナシ

- 五、「女にあへりけり後めたくや思ひけむ」
六、「朝顔の」新勅撰十三、戀三「女の許より歸りて遣しける、業平朝臣」
七、「紐を」
八、「逢見るまでは」萬葉十二「我はときみじたいにあふまでは」
九、「がりにきたるにありきて遅く來けるによみてやりける」

〔三十四〕昔わすれぬなめり^(一)ととひとしける女のもとに

たにせは^(二)みみね^(三)まてはゑる玉かつら^(四)たゑんと人をわかおもはなく
に

女^(四)かゑし

いつはりとおもふものからいまさら^(五)にたかまことをかわればたの
まむ

〔三十五〕昔男いろこのみなりける人^(五)をかたらひてうしろめたなしとや
おもひけむ

我ならてしたひもとくなあさ^(六)かふのゆふかけまたぬ華にはありと
も女かゑし

ふたりしてむすひし物^(七)をひとりしてあ^(八)ひみむまてはとかしと思
〔三十六〕昔紀有常物^(九)にいきてひさしうかゑらさりけるにいひやる
(歸ラザリケル)

一、「續古今十一、戀一」題
しらず 業平朝臣」

二、「問ひし我はも」

三、「親ありて思ひもぞつ
く」

四、「追ひやらむとす。さこ
そ言へまだ追ひやらず人の
子なれば、まだ心勢なかり
ければ、留むる勢なし。女
も」

五、「すまふ力なし。さる間
に思ひは」

六、「俄に親この女を追ひ
うつ。男、血の涙を流せど
も留むるよしなし。率て出
でていぬ。男泣くくよめ
る」

七・コノ歌ナシ

君(二)によりおもひならひぬよの中の人(三)はこれをやこひといふらん
かゑし

ならばねはよのひとことになにをかも戀(二)とはいふととひわふれと
も

「昔わかきをとこけしうあらぬ人をおもひけりさかしらするを(三)
やありておもひもつくとしてこの女をほかへ(四)ならむといふ人のこなれ
は心のいきほひなくてゑとゝめす(五)定んなもいやしければすまうちか
らなしさこ(六)そいゑまたゑやらすなるあひたに思はいやまさりにまさ
るをやこの女をおひいつ男(七)ちのなみたをを(八)とせととゝむるちからな
しついにいぬれ女返人につけて

いつ(九)こまでをくりはしつと人とははあかぬわかれのなみたかわま
て

をとこなくくよめる

一、「出でていなば」
二、「悲しも」

三、「絶え入りにけり。親あ
わてにけり。猶思ひてこそ」
四、「しんぢちに絶え入
りければ」

五、「若人はさる好ける物
思ひをなん」

六、上の衣、袖

七、「いやしきわざも」

いとひてはたれかわかれのかたからむありしにまさる今日はかな
しな

とよみてたへいりにけりをやあはてにけりなをさりにおもひてこそ
いひしかいとかくしもあらしとおもふにまことにたへいりたればま
とひて願なとたてたりけふのいりあひはかりにたゑいりてまたの日
のいぬ時はかりになむからうしていきいてたりける昔のわか男はか
ゝるすけるものおもひなんしける今のをきなまさにしなむやは

〔五六〕昔女はらからふたりありけりひとりはいやしき男のまつしき
ひとりはおてなるをとこのとくあるもちたりけりそのいやしき男も
ちたるしはすのつこもりにうゑ(六)のきぬをあらひて手つからはりけり
心さしはいたしけれともいまたさる(七)わさもならはさりければうゑの

一、「肩を張りやりて」

二、「清らなるろうさう(縁
袵)のうへの衣を見出でて
やる」とて」

三、古今十七、雜上「めのおとうとをもてはべりける人にうへのきぬを贈るとてよみてやりける、業平朝臣」

四、「あひ言へりけりされど憎くはたあらざりけりしめたくざりていかにうしろめたきざりていかではたえあるまじかりけりなをはたえあらざりけるなかなりければ二日三日ばかりさはる事ありてえ行かてかくなむ」

五、「いてゝこし」新古今十五、戀五「題しらず、業平朝臣、出でていにし跡だに未だ變らぬに」

六、「かはらじを」

きぬのかたをはりさきてけりせんかたもなくてなきにのみなきけり
これをかのあてなる男きゝていとこゝろくるしかりければいとときよ(三)
けなりける四位のうゑのきぬたゝかたときにみいてゝ

むらさきのいろこきときはめもはるにのなる草木そわかれさりけ
る(三)

むさしのゝこゝろなるへし

〔三十九〕昔男好色としるゝをんなをあひしれりにくゝもあらざりけ
れともなをいとうたかひうしろめたなしそへにいとたゝにはあらさ
りけりふつかはかりいかてかくなむ

いてゝゆくあとたにいまたかはかぬにたかかよひちといまはなる(五)
らん(五)
みち一本(五)

ものうたかはしさによめるなりけり

一、「思召していとかしこ
らめぐみ使う給ひけるを人
なまめきて」
二、コノ句ナシ

三、「かきて」
四、古今三、夏「題しらず、
讀人しらず」

五、「と」

六、「よびて」

〔四十〕 昔かやうのみことまうすみこを(坐)はしけりそのみこをむなを(二)

とかしこらめしつかひ給けりいとなまめきてありけるをわかき人(三)は

ゆるささりけりわれのみとおもひけるをまた人きゝつけてふみやる

ほとゝきすのかたをつくりて(三)

郭公(四)なかなくさとのあまたあればなをうとまれぬおもふものから

といゑりけりこのをんなけしきをとりに(音へり)

名のみたつしてのたをさはけさそなくいほりあまた(五)にうとまれぬ

れは

時は五月なむありければ男またかゑし

いほりおゝきしてのたをさはなをたのむわかすむさとにこゑした

ゑすは

〔四十一〕 昔あかたへゆく人にむまのはなむけせんとてよ(六)ひたりけるに

一、「家刀自杯さゝせて」
 二、「かづけむとす。主の男、歌よみて袋の腰に」
 三、「此の歌はあるが中におもはらなければ心留めて讀ますはらにあちはひめて」大島本「心とめて讀まずば濃き味はひえしも出で來じ」
 四、「昔、男ありけり。人の女のかしづく、いかで此の男に物言はむと思ひけり。うち出でむ事かたくやありけむ、ものやみになりて死ぬべき時に、かくこそ思ひしかと言ひけるを、親聞きつけて、泣く／＼告げたりければ、惑ひ來たりけれど、死にければ、つれ／＼と籠り居りけり。時はみな月のつごもり、いと暑き比ほひに、宵には遊び居りて、夜ふりてや、涼しき風吹きけり。螢高う飛び上る。この男見ふせりて」
 行く螢雲の上までいぬべし。秋風吹くと雁に告げこせ
 暮れ難き夏の日暮しながむればその事となく物ぞ悲しき

うとき人にしあらざりければいゑとうししてさかつきさゝせなとしてをんなのさうそくかつくあるしのをとこうたおよみてものこしにゆひつけさす

いてゝゆく君かためにとぬきつればわれさゑもなくなりぬへきかな(我サへモ)

「昔みやつかへしける男すゝろなるけからひにあひて家にもりいたりけり時はみな月のつごもりなりゆふくれに風すゝしく吹螿(飛ヒ違フアマボリ)なととひちかうをまほりふせりて

ゆくほたる雲のうゑまでいぬへくは秋かせふくとかりにつけてせ(心バへ)「四十二」昔すきものゝこゝろはゑありあてやかなりける人のむすめのかしつくをいかてものいはむとおもふ男ありけりこゝろよはくいひ(弱ク)いてんことやかたかりけんものやみになりてしぬへきときかくこそ

おもひしかといふにをやきゝつけたりけりまとひきたるほとにしに
ゝければ(家)いゑにこもりてつれ／＼となかめて

くれかたきなつのひくらしなかわれはその事となくものそかなし
き

〔四十五〕昔男ねんころにいかてとおもふ女ありけりされとこの男あた
なりときゝてつれなさのみまさりて(三)

おほぬさのひく手あまたにきこゆれは(思ヘドエコソ)おもゑとゑこそたのまさり
けれ

かゑし(思)

おほぬさとなにこそたてれなかれてもつひによるせは(五あるといふ)
ものを清古のを

〔四十六〕昔をとこありけりものへゆく人にむまのはなむけせんとして日

一、「此の男を」
二、「まさりつゝ言へる」
三、「なりぬれは」古今
十四、戀四「ある女の業平
朝臣を所定めずありきすと
思ひてよみて遣しける、讀
人しらず」

四、「返し男」

五、「ありといふものを」
古今右ノ次「返し、業平朝
臣」
六、コノ句ナシ、「馬のは
なむけせむとて人を待ちけ
るに來ざりければ」

一、古今十八、雜下「紀の利貞が阿波介にまかりける時に、むまのはなむけせむとて、今日といひおくれりける時に、こゝかしこにまかりありきて、夜ふくるまで見えざりければ遣しける、業平朝臣」
二、「なりけるを見をりて」
三、六帖第六「業平」
四、「結はむ事をしぞ」

五、「怨むる人を」
六、六帖第四「紀友則、人の心を如何たのまむ」
七、「思はぬ人を思ふものかは」といへりければ朝露は消え残りてもありぬべし誰か此の世を頼み果つべき」

ひとひまちけるにこそさりければ

いまそしるくるしきものと人またむさとをはかれすとふへかりけり

〔四十七〕昔男いもうとのをかしけなるをみて

うらわかみねよけにみゆるわかくさを人のむすはぬことをしそおもふ

ときこそえければかゑし

はつくさのなとめつらしきことのはそうらなくものをおもひけるかな

〔四十八〕昔男ありけり人をうらみて

鳥のこをとおつととおはかさぬともいかゝたのまむ人のこゝろをしらつゆをけたてちとせはありぬともいかゝたのまむ人のこゝろ

一、續後拾遺十八哀傷「題
しらず 讀人しらず」

二、六帖第四、「在原滋春、
散らずして去年の櫻はあり
ぬとも人の心をいかが頼ま
む」
三、「頼みがた人の心は」

四、古今十一、戀「題し
らず 讀人しらず」

お(ヲ)

とい(言ヘリ)ゑりければをんな

あさ(消エ)つゆはきゑ(殘リ)のこりてもありぬへしたれかこの世をたのみはつ

へき

また男

ふく(三)かせにこそそのさくらはちらすともあなた(三)とみかた人のこゝろ

や

またかゑ(返シ)しをむな

ゆく水にかすかくよりもはかなきはおもはぬ人をおもふなりけり

また男

ゆく水とすくるよはひとちるはなといつれまでてふことをきくら
ん

一、「あだくらべかたみに
しける男女の忍びありきし
ける事なるべし」
二、「人の前栽に菊植ゑけ
るに」
三、古今五、秋下「人の前
栽に菊に結びつけて植ゑけ
る歌、在原業平朝臣」

四、「刈るぞわびしき」

五、「逢ひ難き女にあひて
物語など」

六、「鳴きければ」

七、「かは」、續後撰十三、
戀三「女の許に罷りて物申
しける程に鳥の鳴きければ
讀みはべりける、業平朝臣」

(二) あたにてたかひにしのみありきする事をいふなるへし

〔四十九〕昔男人前栽うゑけるに

(三) うゑしうゑは清古一本

うつつしうゑは秋なきときやさかさむはなこそちらめねさゑかれ

めや

〔五十〕昔男在けり人のもとよりかさりちまきをこせたるかゑり事に

あやめかりきみはぬまにそまとひけるわれはのにて、かくそお

しき

とてきしをなむやりける

〔五十一〕昔男ありかたかりける女に物語なとするほとに鳥のなきぬれ

は

いかにかくとりのなくらむひとしれすおもふこゝろはまたよふか

きに

〔五十二〕 昔男つれなかりけるをんなにいひやりけり

ゆきやらぬゆめち(三)にたとるたもとはあまつそらなき露(二)やをくら
ん

〔五十三〕 昔男(三)ふして思(三)をきておもひあまりて

わか袖はくさのいほりにあらねともくるれはつゆのやとりとそな
る

〔五十四〕 昔人(五)しれぬものおもひけるをとこつれなき女(五)のもとに

こひわひぬあまのかるもにやとるてうわれから身(一本)をもくたきつる
かな

〔五十五〕 昔(七)こゝろつきなまいるこのみなる男(七)なかをかといふ所に家つ

くりてをりけりそこのとなりけるみやはらにこともなきをむなとも
ありけりいなかなりければた(九)からすとてこのを(一〇)とこみ(一〇)をりけるにい

一、後撰九、戀一「題しらず、
讀人しらず、ゆきやらぬ夢路に惑ふ袂には天津空なき露ぞ置きける」

二、「夢路を辿る」

三、「臥して思ひ、起きて思ひ、思ひ餘りて」

四、「なりけり」新勅撰十
七雜二「題しらず、業平朝

臣

五、「男、人知れぬ物思ひけり。つれなき人のもとに」

六、新勅撰十二、戀二「題しらず、讀人しらず」

七、「心づきて色好みなる男」

八、コノ語ナシ

九、「田刈らむとて」
一〇、「のあるを見て」

一、「逃げて奥に隠れにければ女、」

二、「古今十八、雑下「題しらず、讀人しらず」
三、「おとづれもせぬ」

四、「此の宮に集り來居てありければ男」

五、「鬼の」

六、「とてなむ」

七、「ける程の家刀自まめに」

みしのすきもの^(仕業)しはさやとてあつまり^{いりければ一本}いりきければ此男^(二)をくににけいりにけりをんなかく

す ^(三)あれにけりあはれいくよのやとなれやすみけむ人の^(三)をとつれもせ

といひてあつまり^(四)きければ男

むくら^(菴生ヒテ)をひてあれたるやとのうれたきはかりにも^(五)をきのすたくな
りけり

といひてなむいたしたりけるこの女ともほひろはんといひければ^(六)
うちわひて^(落穂)をちほひろふときかませはわれもたつらにゆかましもの

「^(五六)五六」昔男ありけりみやつかへもいそかしくてこゝろもまめならさ
り^(七)ければ家童しとしまめに思はむといひける人につきて人のくにへ

一、「妻にてなむある」
二、「さらば飲まじ」

三、古今三、夏「題しらず、
讀人しらず」

四、「山に入りてぞありける」
五、「男、筑紫までいきたりけるに、これは色好むといふすきものと」

六、「事のなからむ」、拾遺
十九雜戀「題しらず、在原
業平朝臣」

いにけりこの男うさのつかひにていきけるにあるくにのし（二）その官
人のめになむあるときゝてをんなあるしにかはらけとらせよ（三）さらは
のまむといひければかはらけとらせていたしたりけるにさかなゝり
けるたちはなをとりて

さ（三）つきまつはなたちはなのかほかけはむかしの人のそてのかそす

る

（言ヘリ）

といゑりけるにそおもひいてゝあまになりてやまにはいりにける

「**五十七**」昔（五）つくしまていきたりける男ありけりこれはいろこのむなる

すきものそとすたれのうちなる人のいひけるをきゝてをとこ

（染川）

そめかわをわたらむ人のいかてかはいろになるてう（六）ことなからむへ

本
き

をむなかるし

一、「名にし負はば」後撰十九「羅旅」たはれ鳥を見て、（二） 読人しらず、いく世きつらむ

二、「あるべき」

三、「年頃おとづれざりける女」

四、「しけり。夜さりこのあつる人たまへと」

五、「男、我をば知らずやとて」

六、「こけるからとも」こけるがごとし

七、「言へば、涙のこぼるゝに、目も見えず物も言はれず、と言ふ。」

（二） なにしほはゝあたにそおもふたはれしまなみのぬれきぬきるとい（三） あるべき一本

ふなり

「五十八」昔年來をとろへさりけるをむなこゝろかしこくやあらざりけ

んはかなき人のことにつきて人の國なりける人につかはれてもとみ

し人のまへにいてきて物くはせなとし（四） ありきけりなかきかみをきぬ

のふくろにいれてとほやますりのなかきあをゝそきたりけるよざり

このありつる人たまへとあるしにいひければをこせたりけり（五） われを

はしらすやとて

い（古） にしゑの（今） にほひはいつらさくら花（六） わけるかことも一本

な

といふをいとはつかしとおもひていらへもせていたりけるをなとい

らへもせぬとい（七） ゑはなみたのなかるゝにめもみゑす物もいはれすと

一、「なき」

二、「いづちいぬらむとも
知らず」

三、「つける女」

四、「心情あらむ男に逢ひ
えてしがな」

五、「言ひ出でむも頼りな
さに」

六、「夢語りをす子三人を
呼びて」

七、「にいきあひて途にて
馬の口を執りてかうくにな
む」

八、「来てねにけり」

九、「男見えざりければ」

いゑはをとこ

これやこのわれにあふみをのかれつゝ年月ふれとまさりかほなみ
といひてきぬゝきてとらせけれとすてゝにけにけりいづこにいぬら
んともしらす

〔五十九〕昔よこゝろあるをむないかてこのなさけある男をかたらひて
しかなとおもへともいひいてむにもたよりなければまことならぬゆ
めかたりをむすこ三人をよひあつめてかたりけりふたりのこはなさ
けなくいらへてやみぬ三郎なりけるなむよき御をとこそいてこむと
あはするにこの女けしきいとよしこと人はなさけなしかてこの在
五中將にあはせてしかなとおもふこゝろありけりかりしありきける
みちにゆきあひにけりむまのくちをとりてやうくなむ思といひけ
れはあはれかりてひとよねにけりさてのちをさくこねはをんなを

一、「見て」
二、「見ゆとて出で立つ氣色」

三、「にかゝりて家に來てうちふせり」

四、古今十四、戀四「題しらず、讀人しらず、我を待つらむ宇治の橋姫」

五、「逢はでのみねむ」

六、「例として思ふをば思ひ思はぬをば思はぬものを」

七、「思ふをも思はぬをもけぢめ見せぬ心」

八、四字ナシ

九、「いづく」

一〇、「入るべきものを」新千載十二、戀二「女のひそかに語らふわざもせざりければよめる、業平朝臣」

とこの家にいきてかひまみける(垣間見)を男ほのかにまみて(二)

百年にひとへせたらぬつくもかみ我をこふらしおもかけにたつ(三)

といひてむまにくらをかせていてたつけしきをみてむはらからたち(三)

ともしらすはしりまとひて家にきてふせりとこのをむなのせし(三)

やうにしひてたてりてみければをむなうちなきてぬとて

さむしろにころもかたしきこよひもや戀しき人にあはてわかねむ(四)

とよみけるをあはれとみてそのよはねにけり世中のれひとして思ひ(六)

思はぬ人あるをこの人はそのけちめみせぬころなんありける(七)

〔六十〕昔男をむなをみそかにかたらふわざもせざりければいつこな(九)

りけんあやしさによめる

吹風にわかみをなさはたますたれひまもとめつゝいらましものお(一〇)は一本

かゑしをむな(返シ女)いるへきものお一本

一、「ありとも」

二、以下ナシ

三、「おほやけ思して使う
たまふ女の」

四、「さぶらひける」

五、「男の、まだいと苦かり
けるを、この女あひ知りた
りけり。男、女方許され」

六、古今十一、戀一「題し
らず、讀人しらず、色には
出じと思ひしものを」

七、「おりたまへれば、例の
此のみ曹司には人の見るを
も知らで」
八、「行く。されば」

とりとめぬかせにはあれとたますたれたかゆるさはかひまもとむ

へき

とてやみにけり

〔六十二〕 昔みかとのときめきつかはせたまふをむないるゆるされたる

ありけりおほみやすところとていまそかりけるか御いとこなりけり

殿上につかはせ給ける在原なりけるをとこをむなかつたゆるされたり

ければをむなのある所にいきてむかひをりければ女いとかたはなり

みもほろひななかくなせそといひければ

おもふにはしのふる事そまけにけるあふにしかるはさもあらはあ

れ

といひてさうしにをりたまへいとさうしには人のみるをもしの

はてのほりるければこのをむな思わひてさとへゆきければなにのよ

一、「奥に投げ入れてのぼりぬ」

二、「我がかゝる心」

三、「まさりに覺えつゝ」

四、「戀しうのみ覺えければ」

五、「破への具して」

六、「のみ覺えければ」

七、「なりにけるかな」
今十一、「戀」
「題しらず、古
讀人しらず、なりにけらし
も」

八、「いにける」

九、三代實錄三八「天皇風
儀甚美、端嚴如神、性寬
明、溫和慈順、好讀書傳、
游思釋教」

きことゝおもひてゆきかよふに皆人きゝてわらひけりつとめてとの
もり一本

もつかさのみるにくつはとりてをくになけいれてのほりゐてかくか

たはにしつゝありわたるにみもいたつらになりぬへければついにほ

るひぬへしとてこの男いかにせむわかゝる心やめたまへと佛神にも

申けれといやまさりつゝおほゑつゝなをわりなく戀事のみおほへけ

れはかむなき陰陽師して戀せしといふみそぎのくしてなむいぎける

はらへけるまゝにいとゝかなしき事のみかすまさりてありしよりけ

に戀しくおほゑければ

戀せしとみたらし河にせしみそぎ神はうけすもなりぬけるかな

といひてなむぎにけるこのみかとは御かほかちよくおはしまして

曉には佛の御なを心にいれて御こゑはいとたうとくて申給をきゝて

此女はいたうなけきけりかゝるきみにつかうまつらてすくせつたな

一、「此の男をは流し遣してければ」

二、古今十五、戀五「題しらず、典侍藤原直子朝臣」

三、「をかしうてぞあはれに歌ひける。かゝれば此の女は」

四、「それにぞあなるとは聞けど」

五、「なむありける」

六、「身を知らずして」、新勅撰十四、戀四「題しらず、読人しらず」

うかなしきことこの男にほたされてと思てなむなきけるかゝるほとにみかときこしめしつけて此男なかしつかはしければあのをむなはいとこの御息所まかてさせてとのゝくらにこめてしをりたまひければくらにこもりてなく

あまのかるもにすむむしのわれからとねをこそなかめよをはうらみし

となきをれば此男人のくによりよことにきつゝふゑいとおもしろくふきてこゑはいとをかしくてうたをそうたひける此女くらにこもりなからそこにそあなりとはきゝけれとあひみるへきにもあらてかくなん

さりともおもふ覽こそかなしけれあるにもあらぬ身をはしらすて

一、「人の國にありきてかく歌ふ」
二、「來ぬる古今十三戀三題しらず、讀人しらず」

三、清和天皇の御代
四、「大御息所も染殿の后なり。五條后とも申す」

五、「率ゐて難波の方にいきけり。濱を見れば、舟どものあるを見て」
六、「難波津を」後撰十七、
雜三「身のうれへはべりける時津の國にまかりて住みはじめはべりけるに業平朝臣」
七、「今朝こそみつの」
八、「住吉の里住吉の濱を行くに」
二、「下り居つゝ行く」

とおもひをり女しあはねはかくしありきつゝうたふ

いたつらにゆきてはかゑるものゆへにみまくほしさにいさなはれ

つゝ

みつのをの御時事なるへしおほみやすところとはむめのゝきさきな

り

昔男つのくにゝしる所ありけりあにをとゝもたちなむとひ

きいてなきさをうちみければふねとものあるを

なかはつを今日こそみつのうらことにこれやこのよをうみ渡ふね

これをあはれかりて人ゝかゑりにけり

昔男いつみの國にいきけりつの國住吉のこほりすみよしのさ

とのほまゆくにいとおもしろければをりいつゝある人住吉のはま

よめとゝふに

一、「春の海邊に」

かりなきてきくの花さく秋はあれと^(二)はるはうみえにすみよしのは
ま

とよめりければ皆人よますなりにけり

〔六十四〕昔男ありけり伊勢國かりのつかいにいきけるをかのいせの齋

宮なりける人のをや^(親)つねの使よりはこの人よくいたはれといひやり

けりをやのいふ事なりければいとねんころにいたはりけりあしたに

はかりにいたしたてゝやりゆふさはこゝ^(三)にかゝりこさせけりかく

ねんころにいたはりけるほとにいひつきにけり二日といふ夜われて

あはんといふ女はたいとあはしともおもへらすされと人目のしけゝ

れはゑあはすつかひさねとあるひとなれはとを^(遠)くもやとさすねやち

かくなんありける女人をしつめてねひとつはかりに男も^(四)とにきにけ

りをとこはたねられさりければとのかたをみいたしてふせるに月の

二、「歸りつゝこさせけり」

三、「いたづきけり」

四、「男の許に來たりけり」

一、コノ句ナシ

二、「丑三つまであるに、まだ何事も」

三、「いぶかしけれど、わが人を」

四、「待ちをれば」

五、「しばしあるに」

六、古今十三、戀三、業平朝臣の伊勢國にまかりたりける時、齋宮なりける人、いとみそかに逢ひて、またのあしたに人やるすべなく、思ひをりける間に、女の許よりおこせたりける、讀人しらず

七、「いといたう泣きてよめる」

八、「心の闇にまどひにき、古今右ノ返し、業平朝臣、世人さだめよ」

九、「とよみてやりて」

一〇、「ありけど」

おほるなるに人のかけするをみればちひさきわらはをさきにたて
人たてり男いとうれしくて我ぬるところにいていりてねひとつより
うしよつまで物かたらひけりいまたなに事もかたらひあゑぬほとに
女かゑりにければをとかいとかなしくてねす成にけりつとめてゆか
しけれと我人をやるへきにしあらねはこゝるもとなくてまぢみれば
あけはなれてしはしあるほとに女のもとよりことははなくて
君やこしわれやゆきけんおほゝゑすゆめかうつゝかねてかさめて
か
男いたううちなきて
かきくらすこゝるやみに□□にきゆめうつゝとはこよひさため
よ
とてかりにいてぬ野(い)にありきけれとこゝるはそらにていつしか日も

一、「兼けたる」
 二、「えせで」
 三、「立ちなむとすれば、男も人知れず血の涙を流せどえあはず、夜やうく」

四、「皿に歌を書きて出だしたり、取りて見れば」
 五、「渡れど」、六帖第五、「ちぎるえにし」

六、「皿に續松の墨して歌の末を書きつく」

七、「齊宮は水のおの御時文徳天皇の御むすめ惟喬のみこの妹」アリ
 八、伊勢國多喜郡

九、「わらはべに」

くれなむとおもふほとに國守のいつきの宮のかみかけたりければか
 りのつかひありときゝてよひとよさけのみしければもはらあひ事も
 せてあけは尾張國へたちぬへければをとこも女もなみたをなかせと
 もあふよしもなしやうくあけなんとするほとに女のかたよりい
 たすさかつきのうらに

かち人の渡はぬれぬえにしあれば

とかきてすゑはなしそのさかつきのうらにつひまつすみしてかき
 つく

またあふさかのせきはこゑなむ

あくれはをはりゑこゑにけり

〔六十五〕昔男かりのつかいよりかゑりけるにおほよとの渡にやとりて
 いつきの宮のわらゑにいひかけける

一、「新古今十一、戀一」題
しらず、業平朝臣」

二、「すきごと」

三、萬葉十一、今は我が名の
惜しけくもなし、拾遺十
四戀四「題しらず、柿本人
麿、我が身の」

四、「開けど」

五、「思ひける」

六、「目には見て……桂の
如き君にぞありける」

二
みるめかる方はいつこそさをさしてわれにをしへよあまのつりふ
ね

〔六六〕昔男伊勢齋宮に内の御つかひにてまいれりければかのみやに
(参レリ)
すてこといひける女わたくしことにて
(二)すみ一本

ちはやふる神のいかきもてゑぬへしおほみや人のみまくほしさに
(三)
をとこかゑし
(男)返(シ)
(感エヌ)

戀しくはきてもみよかしちはやふる神のいさむるみちならなくに
〔六七〕昔そこにありとき、(四)けれと消息をたにいふへくもあらぬ女の
あたりを(五)ありきて男のおもひける

ありとみて手にはとられぬ月の中のかつらをとこのきみにもある
(六)
かな
かつのことくの本

〔六八〕むかし女をいたくうらみて

一、「かさなる山にあらねども」萬葉十一、「岩根ふみ重なる山はあらねども逢はぬ日まねみ戀ひわたるかも」拾遺十五、戀五、題しらず、坂上郎女一山はなけれど、戀ひやわたらむ」
二、「にゐて行きてあらむと言ひければ女」

三、「みるをあふにて」新勅撰十一、戀一「女に遣しける、業平朝臣」

四、「つれなくば」
五、「ありなむ」

いわねふみかさぬる山はへたてねとあはぬひおほくこひわたるかな
な

〔六十九〕昔男伊勢國なりける女にまたもゑあはてうらみければをむな
おほよとのほまにをふてふみるからにこゝろはなきぬかたらはね
(生フ) (エ逢ハデ)

とも

といひてましてつれなかりければ

袖ぬれてあまのかりほすわたつうみのみるめあふまでやまむとや
する

をんな

(岩間) いわまよりをふるみるめしつねならはしほひしほみちかひもあら
なむ
し一本
なむ一本
しほるくはよひもから(五)ありな

また男

一、「世の人の」續後撰十一
戀一「女に遣しける、業平
朝臣」、貫之集五

二、コノ句ナシ

三、「又えあはで」

四、新古今十五、戀五「題
しらず、讀人しらず」

五、大和物語參照

六、藤原氏の氏神、山城國
乙訓郡小鹽山の麓大原野神

社

七、「近衛司に候ひける翁」
貞觀十七年業平右近權中將
(五十餘歳)

八、「山も」古今十七、雜上

「二條の後のまだ東宮の御
息所と申しける時に大原野
に詣でたまひける日よめ
る、業平朝臣」

九、「とく心にも悲しとや
思ひけむいかゝ思ひけむ知
らずかし」

一〇、「たかきこと申す女御
おはしましけりうせ給て」

なみたにそぬれつゝしほるあた人のつらきこゝろは袖のしつくか

とのみいひてよにあふことかたき事になむ

〔七十一〕昔男伊勢國なりける女をまたはるあはてとなりの國へゆくと

てうらみければをんな

おほよとのまつはつらくもあらくにうらみてのみもかゑるなみ

かな

〔七十二〕昔二條のきささきの春宮の御息所と申けるころうち神にまうて

給けるにつかふまつれりける近衛つかさなりけるをきな人くゝのろ

くたまはりけるつひてに御車よりたまはりてよみてたてまつる

おはらやをしをのまつもけふこそは神よのこともおもひいつ

め一本清古
らめ

〔七十三〕昔きたのみこと申みこいまそかりけりたむらの御門の御こに

- 一、山城國宇治郡山科、文德天皇の勅願寺
- 二、右大臣良相男、貞觀八年右大將
- 三、「いまそかりけりその」
- 四、仁明天皇の皇子人康親王、貞觀元年御出家、法名法性
- 五、「のみこおはします其の山科の宮に」
- 六、「作られたるに」
- 七、「近くは未だ仕うまつらず」
- 八、「夜のおましのまうけさせ給ふ、さるに彼の大將」
- 九、「たゞなほやは」
- 一〇、貞觀八年三月二十三日右大臣藤原良相西京第に行幸
- 一一、「大御行の後奉れりしかば、或人の御曹司の前の階に」
- 一二、「しま好みたまふ君なり、この石」
- 一三、「御隨身舎人して取りに」

おはしますそのみこうせ給てな、七日の御わさ安祥寺にてしけり右大將藤原常行といふ人そのみわさにまいり給てかゑさにやましなの禪師(五)この御もとにまいりたまふに其やましなのみやたきをとし水(六)はしらせなとしておもしろうつくれりまうて給て年來よそにはつか(七)ふまつれとまたかくはまいらすこよひはこゝにさふらはんと申給をみこよろこひ給よるのをましとこるまうけさせ給この大將いて人(八)にたばかり給やうみやつかへのはしめにた(九)にやはあるへき三條(一〇)御行ありしとき紀伊國の千里のはまにありけるいとおもしろきいたてまつれりき御行後にたてまつれりしかはあるみさうしのまへのみそにすゑたりしをこのみこのこのみたまふものなりかのいしをたてまつらむとのたまひてとりにつかはすいくはくもなくもてきぬこのいしきくよりはみるまさりたりこれをたゝにてたてまつらはす

一、「のをなむ、青き苔を刻みて、蒔繪のかたに、此の歌を附けて奉りける」

二、「となむよめりける」

三、「なかに」

四、「我が門に」

五、清和天皇の皇子

六、「時の人、中將の子となむ言ひける。兄の中納言ゆきひらの娘の腹なり」

七、コノ文ナシ

ゝるなるへしとて人くゝにうたよませ給右馬頭なりける人よめり(二)

あかねともいわにそかふるいろみゑぬこゝろをみせんよしのなけ(岩)
(見エヌ)

れは

このいしはあをきこけをきさみてまきゑをしたらんやうにそありけ(三)
る

〔七十三〕昔氏うちの宮(三)にみこ(給)うまれたまゑりけり御うふやに皆人くゝう(給へり)

たよみけり御おほちのかたなりけるをき(翁)なのよめる

わかもとにちひるあるかけをうゑつれば夏ふゆたれかかくれざ(四)
へき

これは貞數(五)の親王行平(六)中納言のむすめのはらなり清和の親王也時人

中將のことなむいひける

〔七十四〕昔(衰)をとるゑたるいゑに藤花うゑたる人ありけり(七)いとおもしろ(七)

一、「奉らすとてよめる」

二、「年の内に」、古今二、
春下「やよひのつごもり
日雨の降りけるに藤の花を
折りて人に遣しける、業平
朝臣」

三、「左大臣 いまそかりけり」

四、「わたりに家を」

五、「盛りなるに紅葉のち
ぐさに見ゆる折」

六、「よよ」アリ

七、「もてゆくほとに」

八、「かたぬ翁板敷の下に
道ひ歩いて、人に皆よませ
はててよめる」

九、「續後拾遺十五、雜上
一河原左大臣の家にまかり
てはべりけるに鹽竈といふ
所のさまを作れりけるを見
てよめる、業平朝臣」

一〇、「舟は」

うさけりやよひのつごもりあめのそほふるに人のもとにをりてたて
まつるとて

ぬれつゝそしめてをりつる藤はなはるはいくかもあらしとおもへ

は

〔七十五〕 昔(三)ひたりのおほひまうちきみにいまそかりけるかもかはのほ

とり六條をいと(四)おもしろくつくりてすみたまひけり神無月のつごも

りかたに菊花うつろひて(五)木草の色ちくさなるころみこたちおはしま

させてさけのみあそひてよあけゆくま(七)にこのとのおもしろきよ

しほむる歌よむにそこなりけるかたいを(八)きな皆人によませはてし

たしきのしたをはひありきてよめる

しほかまにいつかき(九)にけんあさなきにつりするふねのこ(一〇)によら

なむ

一、「となむよみけるは」

二、「此所をめでて、鹽竈にいつか來にけむとよめりける」

三、「仁和の御門芹河に」

四、「時、今はさる事」

五、「もとつきにける」

六、「大鷹の鷹飼にて候はせたまひける」

七、コノ句ナシ

八、後撰十五、雜一「仁和の帝嵯峨の御時の例にて芹河に行幸したまひける日、在原行平朝臣、(歌略)、同じ日鷹飼にて狩衣に鶴のかたを縫ひて書きつけたりける」

九、「おほやけの御けしき」

二、「は聞きおひけりとや」

二)とよめるはみちの國にいきたりけるにあやしくおもしろき所／＼お

ほかりけりわか御門六十餘國の中にしほかまといふ所ににたる所な

かりけりされはなむかのをきなもめてししかはよめるなりしほ□ま

うきしまのかたをつくれりけるとなむ

〔七六〕昔(三)ふかくさの御門のせりかはのみゆきしたまひける(四)になまを

きな(五)のいまはさる事にけなくおもひけれとつきにけることなればお

ゝかたのたかゝひにてさふらひ給けるをすりかりきぬのたもとにつ(七)

るのかたをつくりてかきつけゝる

を(八)きな(八)さひ人なとかめそかりころもけふはかりとそたつもなくな

る行平カ

お□やけの御きそくもあしかりけり(九)を(九)のかよはひおおもひけれとわ

かゝらぬ人きゝとかめけり(一〇)

一、「惟喬親王、文德天皇第一皇子、母は紀有常の妹、承和十一年生、貞觀十四年出家、寛平九年薨（五十四歳）」
 二、「櫻の花盛りにはその宮へなむおはしましける」
 三、「を常にゐておはしましけり、時世へて久しくなれにければ、その人の名忘れにけり、狩は懇にもせで、酒をのみ飲みつゝ、やまと歌にかゝれりけり、今狩りする交野の落の家、其の院の櫻、殊におもしろし、其の木のもとに下り居て、枝を四、かみなかしも皆歌よみけり」
 五、「絶えて櫻のなかりせば、古今一、春上」
 六、「落の院にて櫻を見てよめる、在原業平朝臣」
 七、「となむよみたりける。又人の歌」
 八、「めでたけれ憂き世に何か」とて、その木のもとに立ちて歸るに、日暮れになりぬ。御供なる人、酒を持たせて、野より出で來たり。この酒を飲まむとて、よき所を求め行くに天の川とい

〔七十七〕 昔(二)これたかときこゆるみこおはしけりやまさきのあなたに水成瀬といふ所に宮ありけり年ことの櫻花(三)さかりにかし(彼所へ)こゑなむかよひたまひけるその時右馬頭なりける人まいりつかふまつりければ御とも(後ラカシ)にをくらかしたまはて常に(率テ)いておはしましけりなきさの(院)ゐむのさくら(三)らことにおもしろくさけりきのもとにをりゐてゑたををりてかさし(四)にさして皆人歌をよむにうまのかみなりける人のよめり世中(五)にたゑてさくら(五)のさかさらははるのこゝろはのとけからまし(六)又人

ちればこそいとゝさくら(七)らはあはれなれなにかうきよにひさしかる(八)へき(八)

〔七十八〕 昔(同ジ)をなしみこかたのにかりしありき給けるに右馬頭なりける人をかならず御とも(九)にゐてありき給けりれいのことありき給ふにこ

ふ所に至りぬ」

一、「みこにうまのかみおほみき参る」

二、「天の川のほとりに至る」

三、「かのうまのかみよみて」

四、古今九、羈旅「淮喬の親王の供に狩にまかりける時に、天の川といふ所の川の邊におりゐて酒など飲みけるついでに、親王のいひけらく、狩して天の川原に至るといふ心をよみて杯はさせといひければよめる、在原業平朝臣」

五、「みこ返すく誦したまひて」

六、「仕うまつれり、それが返し」

七、古今、右ノ次「親王この歌を返すくよみつゝ返しえせずなりにければ供にはべりてよめる、紀有常」

八、「入りたまひ」

九、「十一日の月も」

の人かめにさけをいれてのにもていたりまむとてきよき所もと

めゆくにあまのかわといふ所にいたりぬ右馬頭御みきまいるみこの

のたまひけるかたのをかりてあまのかはらにいたるを題にて歌よみ

てさかつきはさせとの給ければよみてたてまつれり

かりくらししたなはたつめにやとからむあまのかはらに我はきにけ

り
ときこゑければこの歌をみこ返く詠給てかゑしゑしたまはず紀有

常御共につかふまつりたりけるか返

ひとゝせにひとたひきますきみまてはやとかすひともあらしとそ

おもふ

かゑりてみやにいらせたまひぬよふるまでさけのみ物語してある

しのみこゑひていりたたたまひなむとす十日あまりの月かくれなむと

- 一、「すれば、かのうまのかみのよめる」
- 二、古今十七、雑上「惟喬の親王の狩しける供にまかりて宿りに歸りて夜ひとよ酒を飲み物語をしけるに十一日の月も隠れなむとしける折に親王酔ひて内へ入りなむとしければよみはべりける、業平朝臣」
- 三、「代りたてまつりて」
- 四、後撰十七、雜三「月夜にかれこれして、上野峯雄」
- 五、「入らじを」
- 六、「たまひし」
- 七、「例の狩しにおはします供に」
- 八、「歸りたまうけり」
- 九、「祿賜はむ」
- 一〇、「けり。このうまのかみ心もとながりて」
- 一一、六帖第四、「小野小町、草結ぶてふ」
- 一二、「とよみける、時は彌生の」
- 一三、「明かしたまひてけり」

す二それにかのうまのかみなりける人のよめる

あ三かなくにまたきも月のかくるゝかやまのはにけていれすもあら

なむ

みこにか三はりて紀有常

を四しなへてみねもたひらになりな五むやまのはなくは月もかくれ

し

〔八十〕 昔水成瀬にかよひ六給惟高のみこれ七いのかりしありき給にけり

御共に右馬頭なりけるをきなつかうまつれり八ひころへてみやにかへ

り給にけり御を九くりしてとくいなむとおもふに御みきたまひるくた

まはせんとてつかはささり一〇ければこゝろもとなくて

枕とて一一くさききむすふこともせしあきのよとたにたのまれなくに

とよみ一二ければやよひのつこもりなりけりみこ御とのこもら一三てあかし

一、「まうで仕らまつり」
二、「おろしたまうてけり。
む月に拜み奉らむとて、小
野にまうでたるに」
三、山城國愛宕郡
四、むつきにか

五、「思ひ出で聞えけり」
六、「公け事どもありけれ
ば」
七、「え候はで、夕暮に歸
るとて」
八、古今十八、雜下「惟喬
の親王の許にまかり通ひけ
るを頭おろして小野とい
ふ所にはべりけるに正月に
とどらはむとてまかりたり
けるにひえの山の麓なりけ
れば雪いと深かりけりし
て彼の室にまかりいたりて
拜みけるにつれづれとして
いと物悲しくて歸りまうで
きてよみて送りける、業平
朝臣」
九、「とてなむ泣くく來
にける」
一〇、「母なむ宮なりける」

給けりかくしつゝまいりつかふまつりけるをおもひのほかには御くし
をろさせ給てをのといふところにすみ給けり□□にをかみたてまつ
らむとてまうでたるにひゑの山のふもとなれば雪いとたかししるて
みむろにまうてゝをかみたてまつるにつれ／＼といとものかなしう
ておはしましければやゝひさしうさふらひていにしへの事なと思ひ
てゝきこゑさせけりさてもさふらひてしかなとおもへともおほやけ
事もあれはゑさふらはてくれにかゑるとてよめる
わすれてはゆめかとおおもふおもひきやゆきふみわけて君をみむ
とは
とよみてなく／＼かゑりにけり
〔八十一〕昔男ありけり身はいやしなからはゝみこなりけりそのはゝな
かをかといふ所にすみ給けりこは京にみやつかへしければまうつと

一、「ひとつ子」

二、「さるに」

三、「歌あり」

四、古今十七、雜上「業平朝臣の母のみこ長岡に住みはべりける時に業平宮仕へすとて時々もえまかりとぶらはずはべりければしはすばかりに母のみこのもとよりとみの事とて文をもてまうで來たりあけて見れば詞はなくありける歌、老いぬればさらぬ別れの」

五、「かの子、いたううち泣きて、よめる」

六、「千代もと祈る、古今、右ノ」返し、業平朝臣、千代もと歎く」

七、コノ句ナシ

八、「公の官仕へしければ、常にはえまうでず。されど、もとの心失はでまうでけるになむありける、昔仕うまつりし人」

しけれとしはくもゑまうてすひとりにさへありければいとかなしうし給けりさるほとにしはすばかりに富のことゝを御文ありをとりきてみればこと事はなくて

をひぬればさらぬわかれもありといへはいよくみまくほしきき

み哉

となむありけるこれをみてむまにものりあゑすまいるとてみちすからおもひける

世中にさらぬわかれのなくもかなちよともたのむ人のこのため

「八三」昔男ありけりわらはよりつかふまつりけるきみ御くしをるし

給てけりものとこのころうしなはしとてむ月にはかならずまうてけり

おほやけにみやつかゑしければしはくもゑまいらさりけれと心さ

しはかりはかはらさりければまうてたるにまた昔つかふまつりし人

一、「禪師なるあまた参り集りて」
二、「ことたつとて、おほみきたまひけり」

三、「たりといふを題にて歌ありけり」

四、「古今八、離別」あづまの方にまかりける人によみて遣しける。いかごのあつゆき、目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる」六帖一、「雪のとむるぞ」
五、「めかれせぬ」

六、「やみにけり」
七、「女のもとに、なほ心ざし果さむとや思ひけむ、男歌をよみて」
八、コノ文ナシ
九、六帖第五

一〇、「男も女もあひ離れぬ」
一一、「出でにける」

の俗なる法師(二)なるまいりあつまりて正月なればことたへ(三)とておほにふきたまひけり雪こほすかことくふりてひねもすにやます皆人ゑひて雪にふりこめられたるを題にて歌よまむといふに

おもゑ(四)とも身をしわけねはめは(五)かれぬ雪のつもるそ我こゝろなるとよめりければみこいといたうあはれかりて御そぬきてたまゑりけり(賜へり)

〔八十三〕 昔いとわかき男わかき女をあひゑりけりをのくを(各)やありければつゝみていひさしてけり(六)年來へて女の方よりなをこの事とげんと(言へり)いゑりければ男うたをよみてやれりけり(八)いかゞおもひけん(九)いまゝ(九)てにわすれぬ人はよにもあらじを(己)のかさま(ガ)としのへぬれば

といひてやみにけり男女(二〇)のあひはなれぬみやづかへになむ(二一)いてたち

一本
ける

〔八十四〕昔男つの國むはらの郡あしやの里にしるよしありていきてす

みけり昔歌ニ

あしのやのなたのしほやきいとまなみつけのをくしもさへてきに
けり

とよめるはこのさとをよめるなりこゝをなむあしのやのなたとはい

ひけりこのをとこなまみやつかへしければそれをたより衛府のすけ

ともあつまりきにけりこのをとこのあにも衛府頭なりけりその家の

うみのほとりにあそひありきていざこの山のうゑにありといふぬの

ひきのたきみにのほらんといひてのほりてみるにそのたき物よりこ

となりたかさ二十餘丈はかりひろさ五丈餘はかりあるいしのおもて

にしるききぬにいしをつゝみたらんやうになむありけるさるたきの

一、「して」

二、「昔の歌に」

三、「ささず」新古今十七、
雑下「題しらず、在原業平

朝臣、萬葉三「石川娘守、

しかのあまはめかり鹽やき

暇なみくしげの小櫛とりも
みなくに」

四、「よみけるぞ此の里を
よみける」

五、「言ひける」

六、「頼りにて」

七、「このかみも」

八、「家の前の海の」

九、「かみに」

一〇、「高さ二十丈、廣さ五丈
ばかりなる石のおもて、し
ら絹に岩を包めらむやうに
なむありける」

- 一、「の大ききして」
- 二、「水は、小柑子栗の大ききにてこぼれ落つ」
- 三、「皆瀧の歌よます、かの」
- 四、新古今十七、雑中「布引の瀧見にまかりて、中納言行平」
- 五、「高けむ」

- 六、古今十七、雜上「布引の瀧のもとにて人々集りて歌よみける時によめる、業平朝臣、人こそあるらし」
- 七、「笑ふ事にやありけむ、この歌にめでてやみにけり」
- 八、「もちよし」
- 九、「來るに」
- 一〇、「漁り火多く見ゆるに、かの」

二、新古今十七、雜中「題しらず、在原業平朝臣」

かみにわらうたは(二)かりにてさしいてたるいしありその石のうゑ(上)にはしりかゝる水せうかうしはかりのおゝきさにてこほれをつそこなる人(三)にうたよますこの衛府のかみまつよむ

わかよ(四)をは今日かあすかとまつかひのなみたのたきといつれ(五)まされり

つきにあるしよむ

ぬき(六)みたる人こそあるらめ白玉のまなくもちるかそてのせはきにとよめりければかたへの人(七)わらうにやありけんこのうたをよみてやみけり(八)かゑりくるみちとをくてうせにし宮内卿もとよし(九)か家のまへ(九)すくるにひくれぬやとりのかたをみやればあまのい(一〇)さりする火おほくみるにこのあるしのをとこよむ

(二)はるゝよのほしか河へのほたるかもわかすむかたのあまのたくひ

か

- 一、「家に歸り來ぬ」
- 二、コノ語ナシ
- 三、「家の内にもて來ぬ」
- 四、「柏をおほひて出だしたる、柏に書けり」

五、六帖第四、「かさしにさして」

六、「田舎びとの歌にては餘れりや足らずや」

七、「我よりは勝れりたる人を」

八、「年へける」

九、新續古今十二、戀二「女に遣しける、在原業平朝臣」

とよみてみなかゑりきぬその夜南のかせ吹てなこりの波いとたかし

つとめてその家のめのこともいてうきみるのなみによせられたる

をひろひていゑにもとてきぬをむなかたよりそのみるをたかつきに

もりてかしは(四)おゑるていたしたりそのかしはにかくかけり

わたつうみのかさしにさすといはふもゝきみかためにはをしまさ

りけり

〔六〕なかの人のうたにてはあまれりたらずや

〔八五〕昔いやしからぬをとこ(七)それよりまさりたる人をおもひかけて

としへになり

人しれすわかこひしなはあちきなくいつれのかみになき名お(オホセ)せ

ん(ン)

一、「思ひわたりければ」

二、「と言へりけるを」

三、「嬉しく、又疑はしかりければ、おもしろかりける櫻につけて、」

四、「心ばへもあるべし」

五、「行くをさへ歎く男、やよひつこもりがたに」

六、後撰三、春下「題しらず、讀人しらず、けふのまた夕暮にさへ」

七、「戀しきに来つつ歸れど、女に消息をだにえせで」

〔八六〕昔つれなき人をいかてとおもひこひわたりければあはれとや

おもひけんさらはあすものこしにてものはかりをいはむといゑりけるをかぎりなくうれしなからまたうたかはしかりければおもしろかりけるくさしにつけて

さくら花けふこそかくもにほふともあなたのみかたあすのよこのと

といふこゝろはゑあるらし

〔八七〕昔月日のゆくさゑなけく男三月のつこもりに

をしめともはるのかきりのけふの日のゆふくれにさゑなりにけるかな

〔八八〕昔こひしきいきつゝかゑれとをむなにせうそこもたせてよめ

一、「葦邊漕ぐ」
二、「行き歸らむ知る人もなみ」

三、「身は卑しくて、いと似なき人を思ひかけたりけり」

四、「起きて、思ひわびて」

五、「なぞへなく」〔六帖第五〕
「になき思ひ」

六、「かかる事は、世のことわりにやありけむ」

七、「二條の后に仕うまつる男」

八、「仕うまつるを」

九、「おぼつかなく思ひつめたる事、少しはるかさむ」

〔八十九〕 あししこくたなしをふねいくそたひ(三)こきかゑるらんしるひとなしに

〔九十〕 昔男(三)み□いやしなからふたつなき人おおもひかけめりけりす
こしたのみぬへきさまにやありけんふしておもひ(四)をきておもひく
てよめる

あふなくおもひはすへし(五)なのめなくたかきいやしきくるしかり
けり

昔もかゝる事ありけりよの事はりにやありけむ

〔九十〕 昔二條(七)のきさひのみやにつかふまつるをとこありけり女(八)のつかふまつれりけるをみかはしてよはひわたりけりいかてものこしに
對面(九)しておもひつめたることはすこしはるけむといひければをむな
いとしのひてものこしにあひにけり物語なんとしてをとこ

一、「まさりぬ」
二、「やめてよ」

三、「この歌にめでて、逸ひにけり」

四、「いは木にしあらねば、心ぐるしとや」

五、「あはれと思ひけり」

六、「もちばかりなりければ、女、身に瘡一つ二つ出で來にけり。女言ひおこせたる」

七、「心もなし」

八、「出でたり」

九、「吹き立ちなむ時必ず逢はむと言へりけり。秋立つ頃ほひに、こゝかしこよなり、その人の許へいかむずなりとて、口舌出で來にけり。さりければ」

一〇、「されば、この女楓の初紅葉を拾はせて、歌をよみて書きつけておこせたり」

ひこほしにこひはまされりあまのかはへたつるせきをいまはとめ

てよ

これをおかしとやおもひけんあひにけり

昔男ありけり女をとかふいふこと月日へにけり女石木ならね

はいとをしうやおもひけむやうく思つきにけりそのころみな月

のつこもりはかりなり女かさもひとつふたつみにいてたりければい

ひをこせたるいまはなにのちもなし身にかさもひとつふたつ

てきにけり時もいとあつしすこし秋風たてあはんといゑりけりさ

てあきまつほとに女のちゝそのひとのもとにいくへかなりときゝて

いひのゝしりてくせてきにけりさりければこのをむなのせうとは

かにむかへにきたりければ女かゑてのはつもみちをひろひてかきを

く

一、「言ひしながらも」

二、「書き置きて」

三、「とていぬ」

四、「さて、やがて後遂に今日まで知らず。よくてやあらむ悪しくてやあらむ」

五、「いにし所も知らず。彼の男は、天の逆手を拍ちてなむ」

六、「呪ひごとは、おふものにやあらむ、おはぬものにやあらむ」

七、「言ふなる」

八、太政大臣基經

九、「日、中將なりける翁」

二、「ちりかひ曇れ」道まがふがに」古今七、賀堀河のおほいまうち君の四十の賀九條の家にてしける時によめる 在原業平朝臣

二、「おほきおほいまうちきみと聞ゆるおはしけり、仕らまつる男」

二、「梅の造り枝に雉を」

秋かけていひしなかに(二)はあ(一)らなくにこの葉ふりしく(三)ゑに(四)こそあり

けれ

とみせて(三)かしこより人(一)をこせたらはこれをやれといひ(三)をきていぬ(四)さ

てのちつひによく(一)てやあるらんあしくてやあるらむ(五)いくところもし

らてやみぬこのをとこはいみ(六)しうあまのさか(七)てをうちてなむ(八)のろひ

をるなるむくつけき事人(六)のおもひはおふものにやある(九)覽(一〇)今こそはみ

めとそい(七)ひける

〔九十二〕昔ほり(八)かはのおほ(九)るまうちきみと申(一〇)いまそかりけり四十の賀

九條家にてせられける屏風(九)に中將なりけるをきな

櫻華(二〇)ちりかひまか(一)ゑをひらくのこむといふなる道(二)まとう(三)まて(四)か(五)に(六)本(七)清古(八)やに

〔九十三〕昔(二)を(三)き(四)おと(五)とき(六)こ(七)ゆる(八)を(九)は(一〇)し(一一)け(一二)り(一三)つ(一四)か(一五)ふ(一六)まつ(一七)る(一八)男(一九)な(二〇)か(二一)つき

は(二二)かり(二三)に(二四)さ(二五)く(二六)ら(二七)の(二八)つ(二九)くり(三〇)り(三一)たる(三二)枝(三三)に(三四)き(三五)し(三六)を(三七)つ(三八)けて(三九)た(四〇)て(四一)まつ(四二)ると(四三)て

一、「古今十七、雜上」題し
らず、讀人しらず、限りな
き」

二、「よみて」

三、「かしこくをかしがり
たまひて、使に祿賜へりけ
り」

四、「女の顔の」

五、「見えければ、中將なり
ける男のよみてやりけり」

六、「戀しくは「古今十一」、
戀一「右近のうま場のひを
りの日むかひにたてたりけ
る車の下簾より女の顔のほ
のかに見えければよみて遣
しける、在原業平朝臣」

七、「返し」

八、「知る知らぬ、古今、
右ノ「返し、讀人しらず」

九、「のちは誰と知りにつ
り」

一〇、「後涼殿の」

一一、「出ださせ」

二二 わかたのむ君かためにとをる華は時しもわかぬものにそありける
とみよみてたてまつりたりければいとかしこかり給てつかひにるく
たまゑり

「九四」昔右近馬場のひをりの日むかひにたてたりける車に女かほの
したすたれよりほのかにみゆれば中將なる人よめてやる

六六 ますもあらずみもせぬ人のこひしきはあやなく今日やなかめくら
さむ

七七 かゑしをむな

八八 するしらすなにかあやなくわきていはんおもひのみこそしるへな
りけれ

「九五」昔男弘徽殿のはさまをわたりたりければあるやむことなき人
の御つほねよりわすれくさを忍草とやいふとてさしいたさせたまへ

りければたまはりて

(二) (生フセ)

忘くさをふる野邊とはみるらめとこはしのふなりのちもたのまむ

〔九十六〕昔男みこたちのせうゑうしたまふ所にまうてゝたつたかはの

ほとりにて

(三) ちはやふる神よもしらぬたつた河からくれなひにみつくとゝは

〔九十七〕昔なまあてなる男のもとにこたちありけるそれを内記なる藤

原敏行といふ人よはひけりこのをむなかほかたちはよけれといまた

わかゝりければにや文もをさゝしからすことはもいひしらすいは

むやうたはよまさりければこのあるしなりける人文の案をかきて女

にかきうつさすさてかゑりこと(六)はしけりことはいかゝありけんめて

まとひてをとこよめりける

(七) つれ／＼のなかめにまさるなみたかはそてのみひちてあふよしも

一、續古今十四、戀四「後
涼殿の局より忘草を忍草と
やいふとて女のいだしては
べりければよめる、業平朝
臣」
二、古今五、秋下「二條の
後の東宮の御息所と申しけ
る時に御屏風に立田川に紅
葉洗れたるかたをかけりけ
るを題にてよめる、業平朝
臣「神代も聞かず」
三、「あてなる男ありけり。
その男の許なりける人を、
内記にありける」
四、敏行、貞観九年少内記、
十二年大内記、寛平七年藏
人頭、九年右兵衛督、延喜
七年卒
五、「されど、若ければ、
文も」
六、「かの主なる人、案を書
きて、書かせてやりけり。
めでまどひにけり。さて男
のよめる」
七、古今十三、戀三「業
平朝臣の家にはべりける女
のもとにのみて遣しける、
敏行朝臣」

清古ぬれて

一、「無し」

二、「返し、例の、男、女に代りて」

三、古今、右ノ次「かの女に代りて返しによめる、業平朝臣」

四、「今まで巻きて、文箱に入れてあり、となむ言ふなる。男、文おこせたり。得る後の事なりけり。雨の降りぬべきに見わづらひはべる」

五、「よみてやらす」アリ

六、「思はず」、古今十四、戀四「藤原敏行朝臣の業平朝臣の家なりける女をあひ知りて文遣せりける言葉に今まうでく雨の降りけるをなむ見煩ひはべるといりけるを聞きてかの女に代りてよめりける、在原業平朝臣」

七、「よみてやれりければ、簀も笠も取りあへで」

八、「まだひ來にけり」

しし

かゑしれひのをむなにかはりて

あさみこそ袖はひつらめなみたかは身さるなるときかはたのま

む

(言ヘリ)

といゑりければ男いたうめてふみはこにいれてもてありくとそい

ふなるをなしをとこあひてのちふみをこせたりまうてこんとするに

あめのふるになむわつらひぬるみさひはひあらはこの雨ふらしと

(言ヘリ)

いゑりければれひのをとこ女にかはりて

かすくにおもひおもはぬとひかたみ身をしる雨はふりそまされ

る

とてやりたりければみのかさもとりあゑてしとぬれてま

けり

けり

けり

とてやりたりければみのかさもとりあゑてしとぬれてま

けり

けり

一、「新古今十一、戀一」題
しらず、貫之、貫之集五
「絶えず波こそす磯なれや」
二、「岩なれや」
三、「聞き及びける男」
四、「蛙のあまた鳴く田に
は」

五、「歌はよまさりけれど
世の中を思ひ知りたりけ
り。」
六、「思ひうんじて」
七、「親族なりければ」
八、六帖第二、あま
九、「となむ言ひやりける。
齋宮の宮なり」アリ
一〇、「いとまめにじちよう
にて、あだなる心なかりけ
り。深草の帝になむ仕うま
つりける。心あやまりや」
深草ノ帝ハ、仁明天皇

〔九六〕昔をむな人のこゝろをうらみて

風ふけはとはに波こそすいそなれやわかこるも手のかはくときなき

とつねのことくさにいひけるをきよをよひける男

よひことにかはつ（四）のいたくなくなるは水こそまされ雨はふらね
と

〔九七〕昔男ありけりうたはたよまさりけれと世中をおもひしりたり

けるあてなる女（五）のあまになりてよの中をおもひくわんして京にもあ

らすはるかなる山里にすみけりもとしたしかりければよみてやりけ
る（七）
しんそくなりければ一本

そむくとて雲にはのらぬものなれとよのうき事そよそになるてう（八）

〔九八〕昔男ありけり深草御門につかふまつりけりその男あたるこ（九）
清古此歌不入

ゝろなかりけりこゝろあやまりやしたりけんみこたちのめしつかひ

一、「あひ言へりけり。さ
て、」
二、「いやはかなにも」古
今十三、戀三「人に逢ひて
あしたによみて遣しける、
業平朝臣」
三、「となむよみてやりけ
る。さる歌のきたなげさよ」
四、「ものやゆかしかりけ
む」
五、「出でたりけるを、男、
歌よみてやる」
六、「頼まるゝかな」
七、「これは、齋宮の物みた
まひける車にかく聞えたり
ければ、見さして歸りたま
ひにけりとなむ」
八、「けななむ消えずと
ら、新千載四、秋上」題し
らず、中納言家持」
九、「いとなめしと」
一〇、「言ひやりける」
一一、「なりにけれ」古今十六
哀傷「櫻を植ゑてありける
にやうやく花咲きぬべき時
にかの植ゑける人みまかり
にければその花を見てよめ
る、紀もちゆき」
一二、「みそかに通ふ女」
一三、「今宵夢になむ見えたま
ひつると言へりければ男」

給ける人をあひしりにけりさて朝にいひやる

ねぬるよのゆめをはかなみまとるめはいやはかなくも成まさる哉

昔ことなる事なくてあまになれる人ありけりかたちをやつし
たれともものゆかしかりけんかもまつりみにいてたるをとこよ
うたをよみてやる一本
みてやる

みてやる

よをうみのあまとし人を見るからにめくわせよともおもほゆる哉

昔男かくてはしぬへしといひやりたりければをむな

白露はけなはきゑなんきゑすとも玉にぬくへき人もあらしを

といゑりければねたしとおもひけれとこゝろさしいやまさりけり

昔男ともたちの人をうしなゑるかもとにいひやりけり

華よりも人こそあたに成にけるいつれをさきにこひむとかみし

昔男忍てかよふをむなありけりそれかもとよりこよひなむゆ

一、「思ひあまり」

二、「女の許に、なくなりけるを用ふやうにて、言ひやりける」

三、「ありもやしけむ」、新勅撰十一、戀一「題しらず、
讀人しらず」

四、後撰十一戀三、頭注五
ニ載セル歌ノ「返し、讀人
しらず、あらずもあるか
な」

五、「又返し、戀しとはさら
にも言はじ下紐の解けむを
人はそれと知らなむ」後撰
十一、戀三「女のもとに遣
しける 在原元方」
六、「ければ」

七、古今十四、戀四「題し
らず、讀人しらず」

めにみゑつるといゑりければをとこ

戀わひていてにしたまのあるならむ夜ふかくみゑは玉むすひせよ
(二)おもひあまり一本

昔男やむことなき女になくなりける人とふらふやうにて
(三)

いひやれる

いにしへはありもやすらんいまそしるまたみぬ人をこふるものと
(三)

は

(女返シ)
をむなかゑし

下ひものしるしとするもとけなくにかたるかことはこひすそある
(四)

へき
(五)

昔をとこねんころにいひちぎれるをむなのことさまになり
(六)

けるを

すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬかたにたなひきにけ
(七)

一、新勅撰十五、戀五「題
しらず、讀人しらず」

二、「心もなし、參り來む、
と言へりければ」

三、古今十四、戀四「題し
らず、讀人しらず」

四、「女の」

五、古今十四、戀四「題し
らず、讀人しらず」

り

〔百七〕 昔をとこやもめにてゐて

なかゝらぬいのちのほとにわするゝはいかにみしかきこゝろなる
覽

〔百八〕 昔男ひさしうを(音)ともせてわするゝこゝろ(三)なしまいらむといゑ

りければ女

たまか(三)つらはふきあまたになりぬればたゑぬこゝろ(絶エヌ)のうれしけも
なし

〔百九〕 昔を(四)むなあたなるをとこのかたみとて(置キ)をきたるものともをみ

て

かたみ(五)こそいまはあたなれこれなくはわするゝ時(お)もあらしもの

一、コノ字ナシ
二、「集りて月見ける」

三、古今十七、雜上「題し
らず、業平朝臣」

四、「まだ世經ずと」
五、「人の御許に」

六、拾遺十九、雜戀「題し
らず、讀人しらず、いつし
かもつくまの祭」

七、擬華舍

八、「まかり出づるを見て」

九、「人に著せて歸さん」
〇、「返し鶯の花を縫ふて
ふ笠はいな思ひを告げよ乾
して歸さむ」アリ

二、「ちぎれること誤れる
人に」
三、六帖第五
一、「掬び」

〔百十〕 昔いとわかき人^(二)にはあらぬこれかれともたち^(三)との月見ける
そか中に一人

(三)あちきなし一本

おほかたは月をもめてしこれそのつもれば人のおひ^(老)となるもの

〔百十一〕 昔男をむ^(四)なのいま^(五)たよにへすとおほえたるか人^(五)のもとに忍て

ものきこゑ^(聞エテ)てのちほとへて

あふみ^(六)なるつくまのまつりとくせなむつれなき人のなへのかすみ

む

〔百十二〕 昔男む^(七)めつほより雨につれて人のま^(八)か^(八)つるをみて^(八)を^(九)りに一本

鶯のはなをぬふてうかさもかなぬるめる人^(九)きせてかゑ^(一〇)さむ

〔百十三〕 昔男契^(一〇)事あやまてる人^(一〇)に

やまし^(一一)ろのいて^(一一)のたま水手^(一二)にくみて^(一二)たのみしかひもなきよなりけ

り

- 一、「と言ひやれど、いらへもせず」
- 二、「住みける女を」
- 三、「かゝる歌をよみけり」
- 四、古今十八、雑下「深草の里に住みはべりて京へまうでくとてそこなりける人によみておくりける、業平朝臣」
- 五、古今、右ノ「返し、讀人しらず、鶴となきて年はへむ」
- 六、「君は來ざらむ」
- 七、「めでて、行かむと思ふ心なくなりにけり」
- 八、「いかなりける事を」
- 九、「折にかよめる」
- 一〇、新勅撰十七、雑二「題しらず、業平朝臣」
- 一一、「京を」
- 一二、「入りて」
- 一三、「今は限りと」後撰十五
- 一四、「世の中を思ひうじてはべりける頃、業平朝臣、つま木こるべき宿」

かういゑといらへす

〔百十四〕昔男ありけり深草にすみけり女やう／＼あきかたにやおもひ

けんものへいてたちてゆくとて

としをへてすみこしやとをいていなはいと深草野とやなりな

む

をむなかるし

野とならほうつらとなりてなきを覽かりにたにやは君かこざらん

とよめりけるにいてゆかんとおもふ心うせにけり

〔百十五〕昔男いかなる事そおもひけるをりにやありなむ

おもふ事いはてそたゝにやみぬへき我とひとしき人しなけれは

〔百十六〕昔男みやこをいかゝおもひけむ東山にすまむとおもひきて

住わひぬいまはかきりのやまさとに身をかくすへきやともとめて

一、「かくて、ものいたく病みて」

二、「わが上に露ぞ置くなる」古今十七、雉上題しらず、讀人しらず

三、「となむ言ひて」

四、「昔男、わづらひてこゝち死ぬべくおほえければ」

五、古今、十六、哀傷「病して弱くなりける時よめる、業平朝臣」

六、以下ナシ

む

なむ(二)とよみをりけるにものいたうやみてしにいたりければおもて

にみつそゝきなむとしければ一本していきいて清古よみしらす

我(三)うゑにつゆそをくなるあまの河とわたるふねのかひのしつくか

とひいひてそいきいてたりけるまこと(四)にかきりになりける時

つ(五)ひに行みちとはかねてきゝしかときふ今日とはおもはさりし

を

とてなむたゑ(絶エ)いりにけり

此本者高二位本朱雀院のぬりこめにをさまれりとそ

伊勢物語 可祕也

- 一、三代實錄
- 二、阿保親王者平城天皇子也
- 三、正三位行中納言

- 四、仲平行平守平等
- 五、放縱不拘略無才學
- 六、授從五位上
- 七、右近衛權中將

元慶四年五月二十四日辛巳從四位上行右近衛權中將兼美濃權守在

原朝臣業平卒業平者故四品阿保親王第五子正三位行平中納言行平弟

也阿保親王娶桓武天皇女伊豆內親王生業平天長三年親王上表曰无品

高岳親王之男女者先(朱)停王號賜朝臣姓臣之子息未預改姓既爲昆弟之子

寧異齒列之差於是詔(四)仲行平業平等賜姓在原朝臣業平體貞閑麗故縱不

拘略无等學善作和歌貞觀四年三月從五位上五年二月拜左兵衛佐數年

遷左近衛權少將尋遷右馬頭累加至從四位下元慶元年(六)遷爲左近衛權

中將明年兼相摸權守後遷兼美濃權卒時年五十六

這伊勢物語者京極黃門定家卿息女民部卿局之眞翰無疑者也

寬文四甲辰初冬

冷泉

左中將爲清